
ROBOT HEART

猫乃 鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROBOT HEART

【Nコード】

N8183T

【作者名】

猫乃 鈴

【あらすじ】

夢を叶えるため、機械技師として働く少女ココと、その前に現れた自称“完璧な人型ロボット”アキツ。

完璧な人型だが感覚・感情という機能をもたず、人間になるため“ココロ”を探しているというアキツにココは“ココロ”を作る約束をする。

途中でロボットを憎む少年クナイと出会い

三人の“ココロ”探しの旅が幕を開ける

“ココロ”は一体どこにあるのか。

旅の最後に、それぞれが見つけた物は。

1 2 話完結のハートフルロードノベル。

A c t ・ 0

> i 2 5 4 8 6 | 9 4 9 <

R O B O T H E A R T ・ 1

- □ □ □

-

舞台はとある小さな大陸の国。

大陸内では東西の国同士による戦争が絶えなかったが、
現在は互いの国の情勢の悪化と内乱もあり
事実上、休戦という形で停止したままの状態が続いている。

戦争により物資は著しく減少。

人々は戦争で残った鉄屑を寄せ集めるようにして街を形成して
いった。

しかし居住できる土地は少なく、政治システムも不安定だった
せいか、

どの街も狭い土地に上下に伸びるように、
建て増しを重ねた無秩序な街並みとなっていた。

そんな街の一つにある小さな店から
物語は始まる

> i25489 — 949 <

その日、少年は朝からずっと店番をしていた。

少年はまだ幼かったが、少年にとってその店で働くことは決して嫌なことではなかった。その店で取り扱っている商品が、今では貴重となっている玩具おもちゃばかりだったから。

この国にもかつて数多くあったはずの玩具たちは、みんな壊れてしまったか、あるいは溶かされ形を変え戦場へ向かったか、その姿を見ることは難しくなっていた。

戦争が休戦状態に入った直後には、主力産業へと資源や物資が優先されて、玩具などに貴重な物資を使うことなど、到底許されることではなかった。

少年は戦争を知らない。

ただ生まれたときからずっと貧しいだけで、少年は自分の世界はそういうものなのだと思っていた。だから、まだ幼い自分が働くことも、至極当たり前のことだった。

それでも、調理場の洗い物や、屑鉄拾いなどの仕事もある中、少年にとってこの店での仕事は、とても心躍るものだった。

今では人々が娯楽に目を向けられるようになってはいるものの、これだけの数の玩具を目にすることが出来る場所は、少年の知る限り他にはない。

色とりどりのガラスで出来たキラキラ光るビー玉。

丁寧に仕立てられた、上等のドレスを身にまとったセルロイドの人形。

汽笛を鳴らす実物の四十分の一スケールの蒸気機関車。

そんな玩具の中でも、ブリキのロボットたちは少年の一番のお気に入りに入りだ。

発条ぜんまいを回すことで命が吹き込まれ、カタカタと器用に手足を動かす彼らは、まるで本当に生きているかのようだった。

カララララン

店のドアに付けられたベルが客の来訪を知らせ、少年は玩具の並ぶ棚にハタキを掛けていた手を止め振り返った。

「いらっしやい」

入って来たのはひよろりとした背の高い、歳は十六、七ほどの少年だった。

それほど寒くないここ最近の陽気には、少し暑いのではないかと思われる、少年の物にしては少し大きめの、フードがついたくすんだ赤いコートを着ている。

「何かお探ですか」

店番の少年はオドオドと訊ねた。

元々、あまり客の来ない店なのだ。番をすることには慣れていても、接客には慣れていなかった。

「ああ。ここの店主は」

客の少年は店の中を見回しながら言った。

「店長は出かけてます。僕、店番なんで……」

「この店はどんなものがあるんだ」

「うちですか。うちは見ての通り、玩具やロボットなら色々そろっていますけど」

客の言葉に店番は少し得意気に答え、そして小さく首を傾げた。

「どんな物をお探ですか」

「ココロだ」

「はい？」

抑揚のない声で返された客の言葉の意味が分からない。

思わず訊き返した店番に、客の少年ははつきりと繰り返した。

「“ココロ”を、探している」

街の下層部は一日を通して日の光があまり届かない。上へ上へと伸びる建物に囲まれた空は、とても遠く小さなものだった。

そんな場所にある一軒の小さな店。トタンで覆われた壁は赤茶く錆びて、空調のためのパイプがそこからいくつも突き出していた。本当に必要なものなのか、車庫のフェンスの前にはガラクタが山と積まれている。そして小さな入り口のドアには店名が書かれているが、掠れていてよく読めない。

その代わりにドアの上に、大きなブリキの看板が打ち付けられていた。

【造屋齒車】つくしやばぐるま

それがこの店の名前だ。

文字通り“造る”ことが【齒車】の仕事。

ひっきりなしに金属音が響いてくる店内では、火花を散らしながら溶接作業をしている男が一人。もう一人は拡大鏡がついたゴーグルをかけ、各々の仕事に没頭している。

「うーん」

薄汚れたカーキ色のつなぎ姿で、胡坐をかきながら作業をしていた一人が、かけていたゴーグルを外して大きく伸びをした。

機械油のついた手で拭ったその顔は、まだ歳若い少女。

肩辺りまで伸びた髪はあちこち跳ねているし、汚れた手で触れたために、ところどころ油が黒い帯を描いている顔は、美人とは言えないかもしれないが、どこか愛嬌があって愛らしい。

少女の名前はココ。

まだ若い小さい頃から機械いじりは得意で、もう何年も【
歯車】で機械技師として働いていた。

「店長」

ココが溶接作業をしている男に呼びかける。

「おう、何だ」

男は答えたが手は止めないし、振り返りもしない。

男の名前はシン。今の【歯車】の店長である。とはいっても現在、
【歯車】の従業員はココと、店長シンの二人しかいないのだが。

手を止めないシンに、ココは自分が作っていた商品を手にして言
った。

「前から思ってたんですけど

」

「給料は上げねえぞ」

機械技師としての腕はいいが、金にセコいのがこの男の残念なと
ころ。

「あたしが今作ってるこれって、やっぱりヤバい代物ですよね」

ココが華奢な肩にガシャリと構えたそれは、黒光りする大型の銃
だった。

シンはココの言葉に、やっと作業の手を止めた。溶接作業用のフ
エイスマスクを取り、代わりに愛用のサングラスをかける。

細面の鬚面で年齢はよく分からない。ガツシリとした体つきはま
さに肉体労働者といったところだろうか。

「な、何を馬鹿なことを言ってるんだココ。この……お馬鹿さんめ」
なぜか小さく動揺しながらも、シンはココの肩に優しく手を置いて言った。

「俺がお前みたいなの、可愛い女の子に、そんな物作らせるわけないだろ」
「店長！」

少々芝居じみたシンの口調にも、ココは感動し声を弾ませる。

「分かったら仕事に戻れ」
「はいっ」

素っ気無さを取り戻した店長の声にも気づかず、いそいそと作業に戻る素直な従業員。

「ちゃんと仕上がってるんだろっな、その玩具の銃。今日渡すことになってるんだぞ」

シンは確認するように訊いた。
その少し可笑しな客が来たのは、三ヶ月ほど前のこと。
若い男女の二人組みで、依頼内容は“玩具の銃”のサンプルを作ること。シンは快く依頼を引き受け、ココに作業を一任した。
男の方が何度か依頼内容の修正に訪れたのだが、そのやり取りもココが直接聞きながら進めていた。
ココは機械技師としての腕はいいのだが、どこか少し抜けている。
シンはそれが心配。

「もちろんです。確かな仕事、確かな品質。【造屋歯車】のモットーです」

店のキャッチコピーを口にするココ。

実際【歯車】の評判はこの辺りでは一番良い。店長のシンに言わせると「東で一番の技術屋はうちだ」となる。

「おう、分かってるじゃねえか」

ココのいい返事に安心したようなシン。するとココがボソッと呟いた。

「本当は警察とか行っちゃおうかと思ってたんだけど」

「何っ?!」

思わず大きな声を出したシンだったが、

「ここ追い出されたら困っちゃうし」

続けて言ったココに、頭に巻いていたタオルを投げ渡して言った。

「お前の腕は買ってんだ。追い出したりしねえよ。親父さんの夢、叶えんだろ？」

そう、ココには夢がある。

父の夢を叶えるという夢が。

「うん」

ココは笑って頷くと、投げ渡された綺麗とはいえないタオルで顔

を拭いた。

少年は看板を見上げ、手にしたメモと店の名前を見比べた。

「造屋齒車……」

ドアのノブを引くと、ガラガラと派手な音が辺りに響いた。ドアベル代わりに付けられた空き缶やガラクタが、ドアを開くとぶつかり合うようになっていいるせいだ。

このやかましいドアベルのおかげで、奥で作業をしているも客が来たことがすぐ分かる。

「いらっしやい！」

その大きな音を聞いて、ココは作業場から店先に出た。

そこにいたのはひよろりとした背の高い少年。この時期、外は寒くはないはずなのに、くすんだ赤いコートをしっかり着込んでいる。

「……見かけない顔……何か御用ですか、お兄さん」

「君がここの店主か」

どちらかというとき常連客や、その紹介の多い【齒車】。訊ねる「
」に逆に少年は訊いてきた。

「え？ あ、ううん。店長なら今さつき出ちゃったんですけど」

シンはココの作った“玩具の銃”を客へと届けるために出かけたばかり。

「そうか残念だ。ここならなんでも作ると訊いて来たんだが」

残念という言葉の割りに、さほど残念な風もなく少年は言った。

「作るよ」

ココがそれにあっけらかんと答える。

「それが【造屋歯車】の売りだもん」

「君が？」

少年がココを見る。少年とココはどうやら歳も同じくらい。自分を見下ろす少年に、ココは胸を張って少し得意気な顔をした。

「腕は確かです。ちなみに名前はココよ。あたしはお金を貯めて夢を叶えるため、ここでもう何年も働いてるんだから」

ココの夢に必要なのはお金だけではない。機械技師としての腕が磨ける、ここでの仕事がココの夢にはとても重要なことだった。

自信満々なココの様子に、少年は少し考えているようだったが、改めてココを見ると言った。

「なるほどそうか。じゃあココ、君に頼む」

「はい」

「“ココロ”を作ってくれないか」

「……“ココロ”って？」

少年の注文にココは眉を寄せる。
何かの部品の名前だろうか。聞いたことがない。

「文字通り“心”だ。俺は“心”が欲しいんだ。俺はロボットだから」

淡々とした口調で言った少年に、ココは元々丸い目を更に丸くして少年を見た。

「ロボット?!」

街の外れにある工場跡に人はいない。人が離れた建物はあつといふ間に朽ちていく。そんな廃墟のフェンスの破れ目を、シンはくぐり抜けた。

「まったく、なんでこんな所で商品を渡さなきゃならないんだよ」

溜息まじりに愚痴を言い、左手に持っていた重いケースを右手に持ち変える。砂利だらけの地面が足の裏に痛い。

「まあ、五百万イーエン現金払いだ。仕方ねえか……」

ふと呟いたが、実はこのことはココには言っていない。

確かに玩具なんかに高すぎるのではないかとも思ったが、客の方が支払うと言っているのだ。問題ないだろう。

しかし、ココが「警察に」と言ったときには少々焦った。

玩具のサンプル作りの報酬としては、どう考えても不正な値段だ。警察なんかに行かれたら、きつとお咎めを受けるに違いない。

それにしても、玩具業界というのも大変なものだ。そこまで金を掛けて、新商品を作らなければならないものなのか。

そういえば、ココは本当にちゃんと商品を仕上げたのだろうか。

シンは近くの空き箱の上に“玩具の銃”の入ったケースを置くと、開けて中を確認した。

何かあつたら五百万イーエンがペアだ。

「しっかし本当……最近の玩具は過激だねえ」

シンはケースから玩具の銃を手を取った。

ヒヤリとした肌触り。ズシリと腕にくる重厚感。まるで本当に壁くらい吹き飛ばせそうだ。

「なんか俺が見せてもらった設計図と、少し違う気がするけど……」

途中、ココが何度か客とやり取りしていたから、何か変更があったのだろう。

「うん。よく出来てるじゃねえか。本物の銃みてえだな、おい！」

つい気分が高揚したのか、シンは銃を構えて離れたところに置かれているドラム缶へと狙いを定めてみる。

「どーん！ なんてな」

たわむ 戯れに引き金を引いてみた、そのときだ。

銃口から眩しい光の玉が発射され、その反動でシンは後ろへと派手に尻餅をついた。続いてシンを襲ったのは、真っ直ぐにドラム缶へと向かった光の玉が、見事にドラム缶を粉々に吹き飛ばした爆風だった。

土煙の後には何も残っていない。
啞然とするシン。

「なんじゃこりゃあ！」

一言叫んだシンの背後で、砂利を踏みしめる音がした。

「……ああ、余計な事してくれたわね」

若い女の呆れたような声がして、シンはハッと振り返った。

「誰だっ！」

「あなたが……ロボット」

じっと見つめるココに、少年は言った。

「名前はアキツという」

無表情だがそれなりに整った顔。よく見ればいい男の部類に入るだろう。乾いた血のような赤みがあった瞳に、同じ色の髪。しかしそれはさらりとして質が良さそうで、大きめのコートに隠れてはいるが細身の体もバランスが良く、さぞかし運動神経がいいのだろうと思われる。

しかし、ココは何より少年がロボットだということに興味していた。

自分の目の前に、人の姿をしたロボットがいる。

「さ、触ってもいいですかっ?!」

目の前に手の平を突き出しながら唐突に言ったココに、アキツは特に顔色を変えることもない。

「かまわないが」

「本当?!」

喜びいそいそと、そして少し緊張しながら、ココはアキツの頬に手を伸ばした。まず指先で軽く、それから手の平で遠慮なく触れる。ココの手で押され歪む頬にも、アキツの表情は歪むこともなく、瞬き一つせず触れられるままだ。

しばらくアキツに触れていたココは、やがて手を離し言った。

「……………人間……………ですよね」

がっかりした様子のココだったが、アキツはきっぱりと即答する。

「ロボットです」

「柔らかいし、あつたかーい」

ひどく不満気に、アキツに触れた自分の手を見るココ。

手にしたアキツの頬の感触は、弾力としっかりととした瑞々しさのある皮膚の感触。そしてぬくもりがあった。

「俺は最新の科学によって作られた、完璧な人型ロボットだ。体は人工皮膚で覆われていて、食物を口にする事で、それをエネルギー源として動作する。機械を休めるため睡眠という形でスイッチを切る。自ら学習することで知識を高め、自らの意思で行動することができる……………というわけで、完璧な人型ロボットです」

「というか完璧に人間じゃん」

アキツの説明に納得するどころか、ココは逆に白ける。

「少し信じちゃいました。いったい何処がロボットなの」

今まで見たこともない、人の形をしたロボットとの出会いに一瞬心ときめいた、この若い機械技師の少女は不服そうに言った。

「感覚がない」

素っ気無く返されたのは、そんな一言だけ。

「は？」

「感覚がないんだ」

思わず聞き返したココにアキツは繰り返した。

「痛みもなければ、暑さ寒さも感じない。悲しいや楽しいといった感情さえない。完璧な人型だが、俺には人にある“心”がない。“心”があれば俺はほぼ人と同じ。俺は人になりたい」

「……………」

真面目な…………いや、無表情なだけかもしれないが、アキツの様子にココはなんだか少し、アキツが可哀想になった。

「だからココ、“ココロ”を作ってほしい」

「そ…………そんなこと言われてもなあ……………」

困った。

「金なら払う」

「そうじゃなくて……………」

そんなものは作ったことがないのだ。
作り方が分からない。

返答に困っていると、ドアベル代わりのガラクタがけたたましい音をたてた。

「ココ！」

店の中に転がり込んできたのは、渡しにいったはずの商品ケースを抱えたシンだった。

「店長？ どうしたんですか」

「ココ、危ねえ。逃げる……」

そう言うと、シンはよろめいて床に膝をついた。

「店長！」

ココは倒れそうなシンを支える。

慌てて走ってきたようで息が荒い。顔に殴られたような痣まであった。

一体何があつたのだろう。

「まったく、本当に余計な手間をかけさせてくれる」

開いたままの店のドアから、男が一人中へと入ってきた。

黒服を着た、腕っ節の強そうな大柄な男。シンも体格はいいほうだが、それよりもさらに大きな男だった。

その後からさらに、一人の女がゆっくりと入ってくる。こちらはスラリとした細身で、金色の髪が胸の辺りまで緩やかにカールしている。冷たい感じのする美人だ。

ココはシンを庇いながら二人を見た。

「あなた達は……」

「動かないでもらえるかしら」

女が胸元から銃を取り出し、ココへと向けた。

「あなたは新商品のサンプル作りを注文した、玩具会社の人達…

…」

そう“玩具の銃”を注文した客の二人組だ。

「まいどー」

ココはお客様にペコとお辞儀した。

「……頭悪い子ね」

可哀想なものを見るようにココを見て、女は言った。

「あれは玩具じゃなくて、本物の武器のサンプルよ」

「お前ら、西側の人間か」

シンが体を起こして二人を睨む。

西と東の戦争が休戦となってからも、西側が戦争を再開する武器の準備を、着々と進めているという噂はよく流れていた。

西は資源は豊富だが人材が少ない。

東の優秀な技術者や科学者などをさらって行くなどという噂まであった。

「こっちはわざわざ気を使って、内密に事を進めてやっていたのに、

そちらの店長さんが見ちゃいけないものを見たからな」

男が苦々しく言う。

「店長、余計な事をつ！」

「お前こそ、本物なら本物だって言えよ！」

「だからヤバイ代物だって言ったじゃないですか！」

喧嘩を始める頭の悪い従業員と、責任転換をする店長。

「……俺はてつきりこんな玩具に五百万イーエンってのがバレたかと……」

「五百万！ なおさら怪しいじゃないですかっ」

「向こうが出すって言うてんだ。いいじゃねえか！」

金にセコいのが、この男の本当に残念なところだ。

「とにかく、皆さんには消えていただくわ」

女がにこやかに銃を構えた。

「ちょ、ちょっと待った、待ったー！」

慌ててシンとココは店の奥へと後ずさった。一人平然としているアキツを盾にして。

ココはアキツの背に隠れながら言った。

「ちょっとアキツ助けてよ、死んじゃうよ」

「“皆さん”に俺も入っているのか。俺はロボットだから死なないが」

ああ、そうですか。……それは羨ましいことだ。

「喧嘩なら、あの世で仲良くどうぞ」

女が細い指を引き金に掛けた。

もうダメだ。

「……助けて……」

引き金が引かれるという、まさにそのとき、ココは思わず言った。

「ココロでも何でも作るから！」

ココがそう叫んだときだ。目の前にあったはずのアキツの背がスツと消えたかと思うと、「うっ」「っ」と女がうめき声を上げ、突然床に倒れこんだ。

「おい?! しっかりしろ」

男は何が起きたのか分からない。ただ、いつの間にかアキツが男のすぐ横に立っていた。

「!」

男はとっさに自分の銃を取り出すと、アキツの鼻先に向ける。しかし、アキツはその銃口を右手で掴むと、何事もなかったかのように握りつぶした。

呆気にとられる男の目の前をパラパラと、それこそ玩具だったかのように、床に散らばる銃の破片。

外装がなくなり見えた銃身は潰されていて、もし引き金を引いたら、男の手の方が吹き飛んでしまっただろう。

「脆い武器だな」

「お、俺の銃が……お前、何者だ！」

「俺はただのロボットだ」

「ロボットだと？ ふざけるな！」

答えたアキツの言葉は逆に男の怒りを煽ったようで、男は今度はナイフを手にするとアキツに向かって行った。

男は決して鈍いわけではない。ナイフの扱いにも慣れている。それでもナイフはアキツを掠めもせず、虚しく空を斬るばかり。

「ちいつ。すばしっこい奴め」

男は自分の背後に逃げたアキツに、振り向きざまに斬り付けようとした。その男の目の前が、突然真っ暗になる。

「うっ！ なんだ!？」

アキツの上着が男に覆い被さり、その視界を奪っていた。

もがき前屈みになった男の首元目掛け、アキツの手刀が鋭く振り下ろされる。

「ぐっ……」

男は呆気なく、その大きな体を床に崩れさせた。

その一瞬の出来事に、ただただ感心する「」。

「すごい、二人共やつつけちゃったよ……」

「おいココ、ありゃあ、どちら様だ」

シンがこっさりココに訊ねる。

「ロボット様だそうです」

銃を片手で碎いた力。余裕で自分に向かって振られるナイフを避ける素早さ。どちらも人並み外れたものだった。

「本当にロボットなのかな……」

すると女の方がよろめきながら立ち上がり、

「くそ……こうなったら、店ごと吹き飛んでもらうよ！」

何やら物騒なことを言って、手にした何かのスイッチを押した。すると、シンが抱えている商品のケースから、カチカチという規則正しいタイマー音が聞こえ出した。

「何?!」

シンは大慌てでケースを店の奥へと放り投げる。

次の瞬間、【歯車】は壮大な爆音と共に吹き飛んでしまった。

風が埃と煙を巻き上げ吹き過ぎていく。

瓦礫の山と化した【歯車】は、時折まだガラガラと崩れ続けている。それを茫然と座り込みながらシンは見ていた。腕には何とか残った店の看板をひしと抱いている。

ひしめき合って建っている周囲の建物には、それほど被害がなかったのだけが不幸中の幸いといったところだろうか。

あの二人組の姿はいつの間になくなっていった。

「店長！。元気だして」

すっかり肩を落としているシンを慰めるココ。

「おつ……なんとかなるさ、店なんて……」

言葉とは裏腹に声は沈んでいる。

「お前こそ、どうする気よ、これから」
「うん……」

ガラリと瓦礫をひっくり返す音がして、ココはそちらを見た。

アキツが瓦礫の中から取り出した、自分の上着と鞆の埃をはたきながら、こちらへと歩いてくる。

「アキツ、荷物あった？」
「問題ない」

シンは立ち上がるとペコペコとアキツに頭を下げた。

「いやあ、すみませんねえ、何かボロボロになっちゃって」

今、瓦礫の中から取り出した上着よりも鞆よりも、埃まみれのアキツの体をはたいてやる。

爆発が起きた際、アキツがシンとココの上に覆い被さるようにして、二人を庇ってくれたのだ。

「あんたが庇ってくれなきゃ、今ごろ死んでるって。信じらんねえけど、あんた本当に口ポ……」

言いかけて、シンはアキツの腕から流れ伝う赤いものに気がついた。

「血ー！！ 血が出てるっ！」

「ええっ」

シンという言葉に驚いてココもアキツを見る。しかし当の本人は相変わらずの無表情で、血が出ているという右腕を見ると言った。

「ああ……気にするな。オイル漏れた」

「オイル?!」

シンとココが声を合わせながら訊き返すが、アキツはそれ以上、その“オイル漏れ”のことは気にもせず、雑に左の手でそのオイルを拭くとココを見た。

「それよりもココ、約束だ。“ココロ”を作ってくれるんだろう?」

確かに。

ココロでも何でも作るから」と。

「はい……そう言いました……」

数分後。

瓦礫と化してしまった歯車から、場所を近くの知り合いの工場（じこうば）に移し、待っていたアキツの前に出されたのは、赤く透き通った飲み物。

「はい、どうぞー」

ココはニコニコと言った。

グラスに入れられたそれからは、何やら苺シロップのような甘い香りがする。

「この赤い液体は」

「“ココロの素”です。コレを飲めば、たちまちあつたかーい気持ちに」

説明するココだったが、

「ココ。今どき子供でも引つかからないような子供騙しは効き目がない。ましてや心の持ちようで何かを変えようにも、その“ココロ”がないので無理だ」
「ゴメンなさい……」

玉砕。

「そんな君には俺の手作りの、このスペシャルハートをプレゼントだ！」

ココに代わってシンが差し出したのは、どうやら鉄で出来ているハート型の何か。あちこち尖っていたり、丸かったり、へこんだり出っ張ったりして、さらに様々なペイントが施された奇抜なデザイン。

「さすが店長！ 滑らかな曲線と直線。そしてこの色。なんて芸術的アーティスティック！」

シンのスペシャルハートを前にしても表情を変えないアキツに、ココが代わりにそれを賞賛する。

「ふっ。見事に喜怒哀楽を表現した一品だ」

自信満々に言っただけのけるシンを、ちょいちょいとココは突付くと、アキツに背を向け小さな声で訊ねた。

「店長……あれ、本当に“ココロ”なんですか」「お前の“ココロジュース”よりマシだろうが」

ひそひそと返すシン。

「あとはこれを君の胸にセットするだけでOKよー！」「胸に……か。どうやって」

シンの言葉にアキツは胸に手を置き訊く。

「ちょっと失礼」

シンはアキツの服の裾をめくって中を確認する。

「女の子は見ちゃいけませんっ」

後ろから興味津々のココの視線を感じて、シンは言った。

「はい」

目を両手で覆うココ。シンは改めてアキツの体を見た。

「どうしたんだ」

黙ってしまったシンにアキツが訊ねる。

「腹に……扉がない」

シンのイメージ、それに今まで修理を頼まれてきたロボットには、どれも腹に中の機械をいじるための扉があったのだ。

しかしアキツの体は滑らかな皮膚で覆われていて、継ぎ目すら見当たらない。

「腹を切るのか」

ならばさっさとやるうと言い出しそんな様子のアキツに、ココは慌てる。

「そんな大手術はここじゃできません！」

いや、大修理というべきか？

「とりあえずさ、やっぱりその“オイル漏れ”見せてよ」

「修理してくれるのか」

「修理、ね……ど、どうすればいいんだろ」

どうも他の機械とは勝手が違うこのロボット。戸惑う若い機械技師にシンは言った。

「包帯巻いときゃいいだろ」

ココに“オイル漏れ”を修理してもらったアキツは、腕に巻かれた白い包帯を見ていた。

ココは工具箱ではなく救急箱を片付けながらシンに訊いた。

「店長、どう思います？ アキツは……」

「人間だろ」

シンは答えた。

「ありゃあ、“人間みたいなロボット”じゃなくて、“ロボットみたいな人間”だ。確かに人並み外れてるが、人でないとは思えん」

そう言うってから、シンは少し顔を顰めた。

「ただ……気になることもある」

「気になること？」

「さつき見た体。胸の真ん中あたりにバーコードみてえな模様があった」

「タトウ？」

「俺が気にしてんのは、バーコードってとこよ」

シンが見た、焼き押されたようなその印。識別のために用意されたようなその模様。

「まあ、俺たちや一品一品、腕によりをかけて物作りする技術屋だけだよ？」

「うん」

「バーコードってのは、大量生産の証だろ」

「大量生産……」

「どうみても人間なんだけど、もしかしたら……あいつはそういうロボットなんじゃあ……なあってことも思ったりしてな」

結局どちらなのかよく分からない。

それでもココは思う。

「ロボットだから“ココロ”がないのか。“ココロ”がないからロボットなのか。……どっちにしても寂しいね」

見ると、アキツは大きくて暑そうな上着を羽織るところだった。

「あ、アキツ行くの？」

「世話になった。ここにはどうやら、俺の探し物はないようだ」

いいえ。何のお役にも立てず。

むしろこちらこそお世話になりました……というところだ。

アキツはそれ以上、別れの言葉を言うでもなく、振り返るでもな

く、少し早い足取りで行ってしまった。

アキツが立ち去った方をずっと見ているココの頭に、ペシッと叩きつけられたものがある。

「いたっ」

シンが寄こしたその薄い紙袋は

「今月分の給料だ」

薄い。

「店も吹き飛んじまった。しばらく営業できねえ」

「？」

シンが何を言いたいのかわからず、首を傾げるココにシンはニッと笑った。

「あいつさ、お前の“夢”に近いところにいるんじゃないっ。」

「店長……」

そう、ココには夢がある。

そのために機械技師として頑張ってきた。

迷い考えるココの背中を押すように、シンはさらに言った。

「こんなトコでじっとしてたって、叶う夢じゃねえっ！って、神サマが言ってたんだ。きつと」

神サマ。店を吹き飛ばすのは、やりすぎだと思っけど。

ココは顔を上げると笑顔で頷いた。

「うん」

「アキツー！」

小さな空が橙色に染まる頃、次の街へと向かう道へと踏み出したアキツは、後ろから聞えた自分の名前を呼ぶ声に立ち止まった。

「待って、アキツ！」

走ってきたのはココ。背には大きな鞆を背負っていて、肩からも小さな鞆を斜めに掛けている。腰には大事な工具入れの入ったポーチ。

「良かったあ、追いついて」

膝に手を置きココは呼吸を整えた。

「どうしたんだココ。そんなに慌てて」

呼吸が落ち着くと、ココは自分より頭一つは背の高いアキツを見上げて言った。

「決めたんだ、あたし。あたしがアキツの“ココロ”を作ってあげ

る

アキツはココの言葉に、無表情のまま首を傾げた。

「作れないんだろっ?」

「だから探しに行くんだよ。ロボットの“ココロ”を。そうしたら絶対に作れるから。アキツにぴったりの“ココロ”が。だから一緒に連れてって」

ココはアキツに手を差し出した。

「あたし、作るって約束したし」

アキツは少しの間、目の前に差し出されたココの手を見ていたが、やがてゆっくりとその手を握り返した。

「宜しく………お願いします」

「はいっ」

ROBOT HEART・1

・ ココロ ・ 終了

Act・0

> i25487 | 949 <

ROBOT HEART・2

- ヨウムシ -

背の高い煙突と、そこから出る煙とで作られたような工業地帯では、

ロボット達の姿をあちこちに見ることが出来る。

戦争が休戦となり街が機能を回復しだすと、
人手は思っていた以上に足りなかった。

その中でも人があまり好まないような仕事を、
ひたすらに続けるロボット達。

無駄なおしゃべりも、文句も言わない。

そんなロボット達が一番多いのは、街の最下層部。
治安も環境も悪いがそこは、その分土地が安く
貧しい労働者達の生活の中心の場となっていた。

夜中。静まり返った街に、突然激しい破壊音が響き渡った。

ひび割れだらけのアスファルトの地面に叩き付けられたのは、ロボットの体。

起き上がれずにいるその鉄の体を、小柄な少年が一人見下ろしていた。肩に鉄パイプを担ぐようにして握っている。

ロボットを見下ろす少年の目には、憎しみの色が宿っていた。

ロボットの体にある無数の傷やへこみは、どうやらこの少年につけられたものらしい。ロボットの足は関節の部分が折れ、配線がずれると外へ飛び出してしまっているし、体を覆う金属板も剥がれ落ちてしまっている。

少年は倒れたロボットをさらに乱暴に蹴り飛ばした。

「てこずらすんじゃないよ。元々がらくたロボットのくせして、なかなか壊れやしない」

馬鹿にしたような少年の口調。

ロボットは壊れた体を引きずりもがく。まるで少年から逃げるように。

そして、

『タスケテ……』

いったいどういうプログラムなのか。機械的なロボットの声が助けを求める言葉を発した。

それを聞いた少年の顔が嫌悪に歪む。

「……なんだと？」

『タスケテ・タスケテ』

「うるさい……」

『タスケテ・タスケテ』

「うるさいんだよっ！ 黙れ！ ロボットのくせにっ！！」

少年は持っていた鉄パイプを振り上げた。

そしてそれは、力任せにロボットのの上に振り下ろされた。

「ロボットのくせに！ ロボットのくせにっ！！」

繰り返し振り下ろされる鉄パイプに、グシャリと潰れていくロボットの顔。

『タア……ス・ケ……デ……』

ロボットの声は低く歪み、やがて闇夜に消えていった。

工業街は煙や機械油の匂いが漂い、常にどこからか稼動する機械の動作音が響いていた。

普通の女の子なら少し顔を顰めるようなこの街だが、ココは違う。この労働者が行き交い、活気溢れる街に少しわくわくしていた。

路上にも様々な店が溢れていて、造り屋として働いていたココには、そこで売られている珍しい機械や部品を見るのが楽しくて仕方ない。キヨロキヨロと街を見ながらココは隣を歩くアキツに言った。

「おつきな街だね、アキツ。ここなら“ココロ”もあるかもしれないよ？」

「だいいいが」

自称『完璧な人型ロボット』は相変わらずの無表情。

機械技師のココは、人になりたいというアキツに“ココロ”を作ると約束した。そのために、アキツとロボットのココロ探しの旅に出たのだが……。

「それよりもアキツ」

「どうした」

「お腹減らない？ 私もうペコペコだよ」

「そうなのか」

「……もしかしてアキツ、空腹感もないとか？」

「ないようだ」

「信じられないよ、まあ。お腹も減らないなんて！」

見た目が完璧な人間の、このロボットとの旅は意外と難しいようだ。

「それなら、どこかで何か食べるか」

アキツはそう言って辺りを見回した。

「アキツはお腹減ってないんでしょう？」

「普通の人と同じように食べ、同じように眠るように言われた」

食事の取れる店を探して、ココの前を歩き出したアキツ。

「ふうん。同じようにね……って、誰に？　ねえ、アキツ待ってよ！」

さつさと行ってしまうアキツの背を追いかけて、ココは足を速めた。

ひしめき合う建物同士の隙間に、しっかりと納まるようにして建っている小さな建物。開きっぱなしの引き戸の上に掛けられた暖簾には『食事処』の文字が豪快に書かれている。アキツはそれを見て中へと入った。

「いらっしやいー！」

出迎えたのは恰幅のいい女将の笑顔と、威勢のいい言葉。

「二人頼む」

アキツが言いながら目の前のカウンターに座る。そこへココが後から入ってきた。

「ちょっとアキツ。お腹が減ってるのは私なんだから」

何を言っても動じないアキツに文句を言うココ。そんなココを見て女将はちょっと眉を上げた。

「おや、珍しいお客だね」

「珍しい？」

「見ての通り、ここいらは労働者連中の男たちばかりだね」

首を傾げたココに、女将は視線で店の中を指す。席についているのは見るからに腕っ節の良さそうな肉体労働者たち。出された食事を掻きこむようにして平らげている。

「うちはメニューなんて洒落たもんはないけど、安くてボリューム満点なのが売りなのさ。それでもいいのかい、お嬢さん」

女将の言葉に、ココは今にも鳴りそうなお腹を押さえる。

「はい。もうお腹ペコペコで」

「ハハハ。あんたあ、二名様お入りだよお」

「はいよお」

女将が奥の厨房に呼びかけると、それに答える主人の声がして、ジユウと熱したフライパンに油を引く音がした。ほどなくして香ばしい食欲を誘う香りが漂ってくる。

女将は客が立った後のテーブルを片しながら、ココたちに訊いた。

「それで、お二人さんはこんな所で何してるんだい」

「“ココロ”を探している」

「ココロ？」

答えたアキツにいぶかしげな表情をする女将に、ココが付け加える。

「えっと、ロボットのココロなんですけど」

「ロボットの？」

「ええと……ロボットの感覚発生装置とでもいいですか……」

「まあ、ロボットが多いからね、ここいらは」

ココの説明に相変わらず首を捻ってはいるが、一応納得したように女将は言った。

「ここいらでも見つからないような部品なら、モグラ通りにでも行ってみるんだね」

「モグラ通り……ですか？」

変わった名前だ。

「そう。街の最下層部だね。ほとんど日も差し込まないから、そう呼ばれてるのさ。あそこはロボットが多いから、修理屋も多いしね。はい、お待ちどう」

口を動かしながらも、器用に店を切り盛りする女将が、ココたちの目の前に迫力のある丼飯を置いた。

「わあ……いただきますー！」

ココは感激して手を合わせると、早速一口、口に運ぶ。安くて早くてボリューム満点なだけでなく、味も良い。

どんぶりいっぱいのご飯を覆い隠すほどに盛られた、肉と野菜。甘辛いタレで炒められたそれは、ほかほかのご飯に最高の相性で、ココは幸せな気持ちになる。

ふと隣のアキツを見れば、黙々と箸を口へと運んでいる。

本当に食べるんだ……。

しかし“ココロ”がないということは、この丼飯もアキツには美味しいと感じないということ。それはやっぱりちよっと可哀想な気がする。

そのとき、店の外から犬の荒い鳴き声がしてきた。

「まったく、やってらんねえや」

その犬を連れた青年が暖簾をくぐった。女将が顔を顰める。

「ちよっとイツチ。犬は外に繋いでおくれよっ」

「分かってんよ」

イツチと呼ばれた青年は入り口近くの席に荷物を置くと、外の街灯の鉄柱に犬を繋いだ。

「まったく、あのガキが。今度見つけたらただじゃおかねえ」

何やらぶつぶつと文句を言っているイツチの横で、犬は相変わらず吠えている。

「うるさいね。他にもお客がいるんだよ！」

女将に言われて、イツチが犬を怒鳴りつける。

「静かにしろ、ロケット」

「ロケットっていうんですか、あの犬」

丼飯を手に口に頬張った肉を飲み込むと、ココは入り口の方を見ながら訊いた。

「嫌だよ。あの犬、誰にでも噛み付くんだからね」

女将の言葉に、ロケットはウウウと低く唸った。黒い毛並みをした大きな犬で、唸り声を出しているその口元からは鋭い牙が覗いている。犬を繋ぎ終わるとイツチは店の中に戻って席に着いた。

「今度あのガキを見つけたら、あいつをけしかけてやるんだ」

「またロケットを壊されたのかい」

「ああ、そうだよ」

苛ついたように答えるイツチ。

「ロケットを？」

ココが話の内容に興味を示すと、イツチはココたちを見た。

「ん？ 珍しいな。見かけない顔だ」

「丁度いい。イツチ、あんたこの子たちにモグラ通り案内してやんなよ。ロボットの部品探してんだってさ。あんた、詳しいだろ」

「おいおい、俺も暇じゃないんだぜ」

女将の提案に、イツチはいかにも面倒だというような顔をした。

しかし少し考えると、にやりと笑いながら言った。

「そうだな、交換条件なら考えてもいい」

「交換条件？」

「ああ。クナイってガキを捕まえて欲しい」

「子供？ 何かしたんですか」

「そいつは俺たちのロボットを壊してるんだ。おかげでこっちの仕事は増えるばかり。憎ったらしいことに、すばしっこいガキだよ。あのガキを捕まえられたら、ロボットの部品が揃ってる所に案内してやるよ」

それを聞いて、それまで黙っていたアキツが立ち上がった。見ればあんなに山盛りだった井飯も、いつの間にか綺麗に食べ終わっている……。

「いいだろう。その条件乗ろう」

「ちょっとアキツ！」

止めようとするココだったが、

「ココ、良かった。意外と早く“ココロ”が見つかるかもしれない」

言ったアキツに呆れたようにココは井飯を掻き込んだ。

「もお、あたし知らないからね。その子が捕まらなくても」

すると、外にいるロケットが突然激しく吠える声が出てきた。

「なんだ？」

イツチは席を立つと、暖簾をめくって表を見た。そこで目にしたのは、大きな破壊音と共に地面に転がるロボット。そのロボットにとどめを刺すように振り下ろされる鉄パイプ。

ロボットが動かなくなると、振り下ろした鉄パイプを肩に背負い少年がこちらを振り返った。その顔にはまだ幼さが残っている。

「よおイツチ。……あ？　なんだ、これ、お前のロボット？」

少年は人を馬鹿にしたような笑みを浮かべると言った。

「クナイ、てめえ！」

「じゃあなっ」

少年は身を翻し逃げ出した。

「待てっ！」

「あれがその子供か」

アキツがイツチの後ろから走り去る少年を見て訊く。

「そつだよ。待ちやがれ！」

犬を繋いだロープを解くイツチ。

「くそ、ロープが絡まった！」

「先に行く」

クナイを追って走り出すアキツ。

「あ、ちょっと。アキツ待って！　ご馳走さまでした！」

自分勝手なロボットに、ココは慌ててどんぶりに残っていたご飯を口に掻き入れると、代金を置いて自分も後を追おうと外へ出たが、

「あの子のことはそっとしておいてあげてくれないかね」

女将がそう言いながら、自分も店の外へと出てきた。クナイの走っていった方を目を細め見る女将に、ココは足を止める。

「クナイって子のことですか」

「ああ。可哀想な子なんだよ」

「……可哀想？」

迷路のように入り組んだ街を走るクナイ。それをアキツが追いかける。その後ろから犬を連れたイツチと、更にその遙か後ろからココが息も切れ切れについて行く。

ロケットがクナイに向かって吠え、クナイは後ろを振り返った。

「イツチの奴、犬なんか連れてきたな。……あとの二人は誰だよ……おっと」

走り続けていたクナイは立ち止まった。

狭い路地の突き当たりは低いフェンスの行き止り。その向こうに道はなく、下の層の通りまで絶壁のようになっていた。

「どうしたクナイ。道がないな。どうするよ」

クナイへと近づきながらイツチがにやにやと笑う。しかしクナイの顔にも余裕の笑みが浮かんでいる。

「捕まえられるもんなら……捕まえてみなっ！」

言いながらクナイはフェンスを跳び越した。やっと追いついたココは驚いて叫ぶ。

「飛び降りた！」
「クナイ！」

イツチは慌ててフェンスへと走り、下を覗きこむ。クナイは途中にあった電線を一度掴んで衝撃を和らげると、無事に地面へと降り立った。

「ここまでおいでー！」

下から一言そう言つと、クナイは走って行ってしまった。

「すごい身軽な子……って、アキツどこ行くの？」

感心して呟いたココは、アキツがフェンスに足を掛けているのを見て訊いた。

「追いかける」

当然のように言つてのけるアキツに、バイバイとココは手を振っ

た。

「あたし無理だから待ってるね」
「掴まれ」

アキツはひよいと片腕で膝の裏からココの体を抱え上げた。

「え？ え？ えええ？！」

戸惑うココにお構いなしに、そのままココを抱え、アキツはフェンスを乗り越え飛び降りた。

Act・3

モグラ通りはその名の通り昼間でも日が当たらず、穴倉のような路地が続いたところで、ロボットが働く姿があちこちに見られた。工場の中では列に並んだロボットが、一糸乱れず規則正しく作業している音が聞えてくる。

クナイはそんなロボットの姿を、建物の影から睨むようにしていた。

「くそ……ロボットの奴……」

憎々しげに呟いたそのとき、

「また壊すのか」
「うわっ」

突然すぐ後ろで声がして、クナイは驚き身を翻して後ずさった。

「なんだよ、お前。追いかけてきたのか！」
「ココ、しっかりしろ」

アキツは抱えていたココの体を下ろす。ココはへたりとその場に座り込んだ。

「死ぬかと思ったよ……」
「……何だよ、お前ら」

クナイが胡散臭さそうな目でアキツとココを見て言った。アキツがそれに答える。

「クナイを捕まえると、こっちの目的が果たせる」

「冗談じゃない。お前らには俺が何しようとか関係ないだろ！」

「それがまったくの他人事でもない」

「……何でだよ」

「俺もロボットだからだ」

「……」

白けたような表情になって言葉を無くすクナイに、アキツは無表情のままだ。すると、クナイは少しだけ顔を赤くして声を荒げる。

「お前っ！ 俺が子供だと思って馬鹿にしてるだろ！」

「……ココ、あれは何を怒っている」

クナイの様子に、アキツはココに意見を求める。

「難しいお年頃なんだよ」

ココは適当に返しておいた。

「馬鹿になどしていない。俺はロボットだ」

「お前のどこがロボットなんだよ！」

怒鳴ってからクナイは少し疲れたように溜息をつくとき、アキツたち背を向けた。

「もういい。俺は行くぞ」

「それは困る」

「うるさい。ついて来んなっ！」

クナイはまた走り出した。アキツはすぐにそれを追いかける。クナイは走るのは得意だが、こつも走りっぱなしというのはさすがに疲れる。息もだいぶ上がった。それなのに、自分の後ろを走るロボットと名乗った奴は、まるで自分が疲れるのを待っているかのように、ピツタリと後をついて来る。

「しつっこいな……」

クナイは貨物車の行き来する線路脇を走りながら、遠くで列車の汽笛がしたのに気がついた。列車が近づいてくる。

「よし」

クナイは走りながら、ちょうど降りてきた遮断機を素早くくぐって、線路の向こう側へと渡った。それでももう追いかけて来れない筈だ。

クナイは後ろを振り返り、からかうように言った。

「どうした！ こつち来いよー！」

するとアキツはクナイを追い、言われるままに遮断機を越えた。列車はもうすぐそこまで来ている。

「アキツ！ ダメ！ 危ない！！」

後ろからとろとろと追いかけていたココが、それを見て叫んだ。激しい列車の汽笛が危険を知らせる。

「バカ！ 本当に来るなよ！」

クナイも慌てて言う。
耳をつんざくようなブレーキ音が響いた。

「アキツ！」

列車はアキツが立っていた辺りを、だいぶ通り過ぎた所で、ようやく止まった。

クナイは青ざめた。

「…お、俺のせいじゃない。俺のせいじゃないぞ！」

だって、普通は列車が来ている線路になんか入らない。そんなの誰だって危ないって分かってる。

「アキツ！ アキツ!？」

ココは線路へと走り寄った。列車の前に恐る恐る回りこみ、辺りを見回す。身を屈めて列車の下も覗きこんでみるが、アキツの姿はどこにもない。

「ない……死体がない。アキツが……アキツが粉々になっちゃった」

泣きそうな声で言いながら、アキツの欠片を探すココ。その頭上から抑揚のない声がした。

「ここだ。ココ」

「アキツ?!」

しかし、声はしても姿は見えない。

「こ、こっつて、どっ」
「列車の屋根の上だ」

見上げてみると、アキツは列車の上に立ってココを見下ろしていた。

「いつの間に！ 大丈夫？ 怪我……じゃなかった。故障は？」
「問題ない」

そう言っつて列車の屋根から下りてきたアキツには、言葉通り掠り傷一つない。

クナイはそれを呆気にとられ見ている。

あの一瞬で列車の屋根の上に？ そんな馬鹿な話があるか。

そして、アキツが言っていた言葉を思い出す。

『俺はロボットだ』

持っていた鉄パイプを握る手に力がこもっていく。

「ココ」
「何？」

ココはアキツの体をチェックし、本当にどこにも故障がないことを確認してホッとした。

「クナイが戻ってきた」

先ほどまで逃げていたクナイの方から、こちらへと近づいて来る。その顔はひどく険しくアキツを睨んでいた。

「本当だ……って、危ない！」

風を切る音がして、鉄パイプがアキツ目掛けて振り下ろされる。アキツはというと、咄嗟のそれにも眉一つ動かさず、難なくそれを避けた。

「何のつもりだ」

「お前が本当にロボットなら、俺はお前をぶっ壊すんだよっ！」

そう言っつて、更にアキツに向かって鉄パイプを振り回すクナイ。

「ねえ、なんでクナイはロボットを壊すの?!」

ココの言葉にクナイの動きが止まった。

「……ロボットは……」

低く搾り出されるような声。

「ロボットは俺のたった一人の家族を殺したんだ」

「え?」

「だから、お前らロボットはみんなぶっ壊してやるんだ!」

再び鉄パイプを振り上げたクナイだったが、そこへ警官の笛の音が聞えてきた。

「事故があつたのはここか?! 何をしている!」

走ってくる警官の姿が見えたクナイは、

「絶対にぶっ壊してやるからな！」

吐き捨てるようにアキツに言うと、走り去って行った。

店の外で行き交う人を見ているのは食事処の女将。日暮れてきていた頃、向こうからアキツとココが歩いてくるのが見えた。

「ああ、戻ってきたね」

女将は手にしていたアキツの荷物を渡した。

「ほら、荷物忘れたよ、お兄さん」

「すまない」

荷物を受け取るアキツ。

「あの……」

訊こうか訊くまいか、迷うようなココの声に女将が首を傾げる。

「ん？」

「あの……クナイが家族をロボットに殺されたってというのは……本当ですか」

それを聞いて、女将の顔が曇る。

「それは……あの子が言ったのかい」

「はい」

「そう。もう一年になるんだね……イサナが死んでから」

どこか遠くを見るような目をする女将。

「イサナさん？」

「クナイの姉さんだよ。あの子の両親は二人とも、あの子の幼いときに亡くなっちまってね。クナイはもちろん、イサナがいなきゃ生きてなんかいけなかったと思うけど、イサナもクナイがいなかったら、きつと生きる目的なんてなかっただろうね。本当、仲のいい姉弟だったよ」

女将の口調は優しい。当時の様子を思い出しているようだ。

「なんでイサナさんは」

「ロボットの誤作動だったんだよ。クナイが撃たれて、それを庇ったイサナに弾が当たったんだ」

「誤作動……」

「最新の警備ロボットだったんだ。もっとも、あれを見たのは、あの日が最初で最後だったけどね」

女将と別れ街を歩くアキツとココ。日は落ちて元々薄暗い街は、更に暗くなってきている。

ココはアキツに提案してみた。

「ねえ、アキツ。クナイ捕まえるのやめて、自分たちでモグラ通り探してみようよ。あのイツチとかいう人に頼らないで」

「なぜだ」

「なんとなく……クナイの気持ちも分かるってどうか」

ココは機械技師だ。精巧に作られたロボットを見れば胸が躍る。しかし時に、人よりも強い力を持ったそれらが、危険な存在になることも知っている。

ロボットに姉を殺されたというクナイが、ロボットというものを憎むのは仕方がない気がした。だからといって、アキツを壊されたら困る。

そこへ聞き覚えのある犬の吠える声があった。

「噂をすれば、だ」

ロケットの綱を引きながら、イツチがやってくる。

「なんだ。結局捕まらなかったのかよ」

「自分だって捕まえらんなかったくせに」

アキツたちを見て開口一番言ったイツチの言葉に、ココは膨れる。不満げなイツチにアキツは言った。

「安心しろ。今度は向こうから近づいてくる」

「は？ 何でだよ」

「俺を壊しにだ」

それを聞いて、イツチが意味が分からないといった顔をするのをココは見た。

「よく分かんねえけど、今度は逃がすなよ？ 俺は今から見回りだからな」

「分かった」

アキツが頷くと、イツチはロケットを引つ張りながら、見回りへと向かった。路地の角をイツチが曲がったとき、アキツの後方から軽い足音が走り寄ってきた。

ビュンと空を切る音がして、アキツは後ろから振り下ろされた鉄パイプを避けた。

「このやるっ！」

クナイが当たらなかった鉄パイプに、崩れた体勢を立て直す。

「クナイ！」

思わず言ったココの声に、イツチが路地から顔を出した。

「なんだと?! どこだっ」

クナイはアキツを狙ってまた鉄パイプを振ったが、アキツにはまったく当たらない。何度目かの攻撃で、逆にアキツに鉄パイプを叩き落されてしまった。

「……っ！」

カラカラと音を立て地面に落ちる鉄パイプ。

叩かれ痺れる手を握り締め、クナイはアキツをキツと睨みつける。そんなクナイにも、アキツは相変わらずの表情だ。

「そんなもので俺は壊せないぞ」

そこへイツチとロケットが戻ってきて、クナイはまたアキツを壊せないまま逃げ出した。

「待て、クナイ！」

クナイにとつてここは生まれ育った街。小さな路地から抜け道まですべて知り尽くしている。逃げるのはお手の物だ。いつものようにイツチを撒くと、狭い路地の一つを入れていったクナイは、目の前に現れた高いフェンスと、板で作られた壁に驚いた。

「何だよこれ。こんなもの昨日まで……」

戸惑うクナイの後ろで犬の唸り声が出た。

「イツチ……」

「残念だったなクナイ。俺も馬鹿じゃないからな。お前が使う道は塞がせてもらったんだよ」

にやにやと勝ち誇ったような笑みを浮かべ近づいてくるイツチに、クナイは後ずさるが壁に背が付き、それ以上は身動きが取れなくなる。

「さてと、今日こそ観念して……」

イツチは言いながら、ロケットが綱をぐいぐいと引っ張る強さに困惑し始めていた。低く唸っていたロケットはやがて激しくクナイへと吠えだした。

クナイもロケットが牙を剥く様子に、怯えたような不安な顔をし始める。

「おい、ロケット。大人しくしろっ。あっ！」

ロケットの勢いに、思わずイヅチは綱を手放してしまった。自由になったロケットは、弾かれたようにクナイに向かって襲い掛かって行った。

大きく開かれた口。鋭く尖った牙がクナイの目の前に迫ってくる。

「うわあああっ！！！」

クナイは身を縮めて固く目を瞑った。

しかし、いつまでたっても、犬の牙が体に食い込む痛みは襲ってこない。怖々とクナイは目を開いた。

「無事か」

目に入ったのはそう言ったアキツの背中。見るとクナイを狙っていたロケットは、アキツの腕にしっかりと食らいついていた。

「ロボット……お前、俺の代わりに……」

アキツは立ち上がり、腕に牙を深々と食い込ませているロケットを振り払った。ロケットは地面を転がり、イヅチの足元へ尻尾を巻いて逃げ込む。

座り込んでいたクナイは、そのとき顔に何か冷たいものが飛んだのに気づいて、手の甲でそれを拭った。

「何だこれ……」

拭ったことで薄く引きのばされていたが、薄暗くなった空の下でも分かる赤い液体。

「おい、何だよこれ！」

顔を上げると、目の前にあるアキツの手から、地面にポタポタと垂れている物がある。

「……血？ ロボット、お前血が出てるっ！」

クナイは叫んだ。

「お、俺は知らないぞ。行くぞ、この馬鹿犬っ！」

キャンキャンと鳴くロケットを引きずりながら、イツチは逃げるように行ってしまった。

「うあ……血……」

アキツの手から流れる物に気づいたクナイの顔は真っ青に青冷めて、体は小刻みに震えている。

「血……血だっ」

「おい。しっかりしろ。おいクナイ」

取り乱し息も上がっているクナイの肩をアキツは掴むが、

「わああっ！」

近づいた鉄錆に似た匂いに叫び声を上げると、クナイは意識を手放した。

そこへ、アキツを見失ってしまっていたココが、やっとアキツを

見つけて駆けて来た。

「アキツ？ こんなところにいた。どうしたの？ クナイは？」

「気を失ったようだ」

「何で？……って、アキツ、また血！」

アキツのコートに染み出したそれは、地面に滴り落ちている。

「“オイル漏れ”だ。腕を犬に噛まれた。それよりクナイを運ぼう」

アキツは言って、小柄なクナイの体を軽々と肩に背負って歩き始める。

「私はアキツの方が心配だよ」

その後ろを溜息交じりに言いながらココはついて行った。

Act・4

「弱虫！」

言われてクナイは顔を顰めてうつむいた。
そんなことは知っている。

「早くしろよ！」

別の声もそう言ってクナイを責める。

「やだ……できない」

消え入りそうな声でいつも自分を苛める、いじめっ子二人組になんとか言い返す。

「あんなただのマスコットロボが怖いのかよ」

「弱虫！ 弱虫！」

いじめっ子はクナイを小突きながら、更にクナイを責める言葉を浴びせる。クナイは小さな体をもっと小さくして、それに耐えていた。すると、

「じらあー！」

どこからか怒鳴る声が出た。

「げ。この声は」

「あんたたち！ またうちの弟を苛めてるね！」

遙か遠くから、こちらに向かって走ってくる若い女の姿。手には
いったいどこから持ってきた物なのか、モップを握り締めている。

「うわあ！ やべえ。イサナだっ」
「逃げろっ」

慌てて走り出すいじめっ子たち。

「この悪ガキども！」
「わああー！」

モップを振り上げながら追いかけてきたイサナに、いじめっ子たちはあっという間に逃げていってしまった。

「まったく……クナイ、平気か？ 怪我は？」

イサナはいじめっ子たちが逃げていった方をちよつと睨んでから、クナイの方へと向き直った。その顔は先ほどいじめっ子たちを追いかけていたときは、打って変わって優しい。

「姉ちゃん……」

クナイは視線を落とした。

こうして自分がいじめっ子に絡まれているのを、イサナに助けられるのは初めてではない。それが恥ずかしいし情けない。

体も小さくそれほど力もないクナイに比べ、イサナはどこか男勝りで、すっかりいじめっ子たちからは怖がられる存在になっていた。幼い頃に両親を亡くしたイサナは、さらに幼かったクナイの姉であるというだけでなく、母であり、父でもあった。それが強さと優

しさを兼ね備えたイサナの性格の源といえる。

どこか強くなりすぎた感じは否めないが、女性としての美しさもイサナにはあった。血が繋がっているクナイと同じ褐色の肌に、艶のある黒い髪と瞳。着飾れば上層部に住んでいる金持ちの娘なんかよりも美人なのだろうが。

「ほらあ。どうした、そんな顔して。あいつらに何言われた」

目下、イサナにとって大切なのは、この歳の離れた弟のことだけだった。

クナイは道具屋の前に出されている、客を呼び込むためのロボットの指差した。

「あれの腕……取って来いって」

「あれの？」

決められた動作をただ繰り返すだけのマスコットロボ。その腕を取ることもなんて、簡単なことのように思う。

「うん……そんなことしたら、あいつ腕なしになっちゃう……」

イサナはロボットのの方を見て言ったクナイの言葉に、一瞬きよとんとしたが、次の瞬間「あつはは！」と豪快に笑った。クナイが顔を赤くする。

「何だよ。笑わなくてもいいじゃんか！ どうせ俺は弱虫だよ」

膨れてそつぽを向くクナイの頭を、イサナは優しく撫でる。

「クナイ。あんたは弱虫なんかじゃない。あんたは優しいイイ子だ

「よ」

感情も何もないロボットを、腕がなくなったら可哀想だと思えるのは優しいから。

「俺、でも強くなりたい」

クナイが欲しいのは優しさよりも強さ。

「あんたは強いよ」

言われてクナイの顔が渋る。

「姉ちゃんの嘘つき。俺、強くない」

「あんたが優しいのは強いから」

それはとても分かりづらいものだけけど。力の強さや、喧嘩の勝ち負けと違って分かりづらいけれど。苛められても、いじめっ子の言うことをそのままに聞くことをせず、自分を貫けるのは強いから。

「あんたは強い。あたしが言っただ、間違いない」

少々強引に言ったイサナに、納得しかねるクナイはイサナを見上げた。

「じゃあ……もっと強くなりたい」

「もっとねえ……なれる？」

「うん。そしたら、今度は俺が姉ちゃんを守れんだろ？」

そう。ずっと守られてきた。今はまだ無理かもしれない。でも、

いつかは。

「言ってくれるじゃないか」

イサナは嬉しそうに小さな弟の言葉に微笑むと、その頭をくしゃくしゃと撫でた。照れくさそうにクナイも笑う。そんなやり取りをしながら歩いていると、食事処の前で途方に暮れている女将の姿が見えてきた。

「まったく、嫌になるね」

ぼやく女将にイサナは声を掛けた。

「どうしたの女将さん」

「ああ、イサナ。ほら、うちのロボットの腕、壊されちゃったのさ」
肩をすくめる女将の前には、腕から導線をむき出しにしているロボット。腰を痛めた主人の代わりに、店で使う食材の運搬をしていたものだ。

「きつとあいつらだ……」

クナイはロボットを見て呟いた。

「俺、取り返して来る」

「もう暗いよ！」

「すぐ戻るー！」

言いながらクナイは走って行ってしまった。そんなクナイを見送りながら女将は微笑む。

「イイ子だね」

「でしょ。あたしの弟だからね」

女将の言葉に、イサナは当然のように答える。

「そついや知ってるかい」

「何？」

「なんだかこの辺りに、新しく警備ロボットが見回りを始めるんだつてさ」

「警備ロボット？」

「そう。少しはここいらの治安も、それで良くなるといいんだけどねえ」

工業街の最下層部は、貧しい者たちの溜まり場のような所だ。確かに治安がいいとは言えない。

頭上で街灯がチカチカと瞬いて、街のあちこちでちらほらと明りが灯り始める。夜が近い。

「もう行くのかい」

「うん。あたし、やっぱりあの子が心配だから見てくる」

我ながら、親馬鹿ならぬ姉馬鹿の心配性だとイサナは思うが、放っておいてもいずれは自分から離れていってしまうときが来るのだ。もう少しの間、甘やかしたっていいじゃないか。

イサナは女将に笑って手を振ると、クナイの後を追って小走りに駆け出した。

トタンでできた壁の、足元にできている割れ目から、クナイは中を覗き込んだ。そして誰もいないことを確認すると、潜り込むようにして中へと入る。

ガラクタだらけのそこは、いじめっ子たちの秘密基地だった。そのガラクタの中に、もぎ取られたロボットの腕を発見する。そやっぱり。

クナイはロボットの腕をガラクタの中から引きずり出すと、抱えるようにして両手に持った。

持ち帰れば、きつと女将は喜ぶだろう。

そしてクナイはいじめっ子がいなかったことにホッとして、ホッとしたことにまた少し情けなくなった。

クナイはこっそりとトタンの割れ目から外へ出た。

その目に映ったものは、見覚えのない大きなロボット。ロボットは秘密基地から出てきたクナイの姿を捕らえると、体をクナイへと向けた。

「なんだ、あれ」

街でよく見かける労働用のロボットよりも、ぴかぴかでなんだかカッコイイ。

『不審人物発見・止マレ・手ヲ上げロ』

ロボットはクナイに向かってそう言った。モニターがクナイを映しセンサーがクナイの手にある、ロボットの腕に止まる。

「え？ 何」

『武器ノ所持ヲ確認』

ロボットの体からマシンガンの銃口が出てきて、クナイに照準を合わせた。

『無駄ナ抵抗ハ・ヤメロ・武器ヲ捨テテ降伏シロ』

機械的な音声の言った言葉に、クナイは苦笑いした。

「はは。何？ これのこと？ これ、武器なんかじゃないって
手にしたロボットの腕を、前に差し出して見せる。

『十秒以内ニ武器ヲ捨テロ・十……九……』

ロボットがカウントを始めて、クナイは慌てた。

「わ、分かったよ。ほらっ。これでいいんだろ！」

仕方なく、せっかく取り返したロボットの腕を放り投げるクナイ。
しかし

『六……五……』

ロボットのカウントは止まらない。

「待てよ！ ちゃんと言う通り……」

『二……一』

カウントが終わり、ロボットの銃口が火を噴いた。

「わああっ！」

咄嗟に前へ飛び、なんとかロボットの攻撃を避けたクナイ。先ほどまでクナイが立っていたトタンの壁際は、穴だらけになって崩れ落ちた。クナイは恐怖に震えながら駆け出した。

『凶悪犯・逃亡・追跡スル』

ロボットはけして慌てることなく、クナイを追いかけ始める。街を走り回るクナイとそれを追うロボットを、街の人たちが何事かと振り返る。

「な、なんで」

『止まれ』

クナイに向かって、またマシンガンが発射された。

「わあっ！ わああっ」

クナイが頭を抱えながら角を曲がると、そこは行き止まり。

「あ……」

壁を叩くクナイの後ろ、角の向こうにロボットが姿を現した。ゆっくりとマシンガンの銃口がクナイに狙いを定める。

「誰か……」

震える声で助けを求めるが、それを掻き消すように、マシンガンが激しい音を立て発射された。

クナイは目を閉じ、その瞬間、体に衝撃を受けて地面に仰向けに倒れこんだ。割れたアスファルトの地面に擦るように背中を打ち付けて、一瞬息が出来なくなる。

やがて銃声が止み辺りが静かになると、クナイはきつく閉じていた目を開いた。

見えるのは暗くなったくすんだ空。

そして、何か柔らかな物が自分の上に覆い被さっているのに気がついた。

「姉……ちゃん？」

イサナだった。イサナはクナイの声に体を浮かせると、クナイの顔に手を当てる。

「クナイ。良かった……怪我、してないね？」

「姉ちゃん」

「良かった……」

安堵したように言うと、イサナはまたクナイに覆い被さった。

『ターゲット駆除・完了』

ロボットは動かないクナイとイサナに、マシンガンを体にしまつと去っていった。

クナイはしばらく仰向けのまま地面に倒れていた。

いったい今のは何だったんだろう。頭が混乱して訳が分からない。早鐘を打っていた心臓が落ち着きを取り戻してきて、クナイはま

だ自分の上にいるイサナに声を掛けた。

「姉ちゃん？」

返事がない。

「姉ちゃん、起きて」

重い。こんなに姉は重かっただろうか。

ずっしりと自分に覆い被さっているイサナで、身動きが取れないクナイは、唯一動かせる右手でイサナの肩を叩いた。

「姉ちゃん、重いよ」

ちよつと苦笑しながらイサナを揺する。

「姉ちゃんってば……」

クナイはふと地面に目をやり、そこに水溜りが広がっていくのを見た。暗くてよく見えないが、それはひび割れたアスファルトの溝を伝って、地面についているクナイの顔に近づいてくる。

それが何だかとても嫌だった。

「姉ちゃん、起きて……」

クナイは何かイサナの体を押し上げようとする。すると、その手にも湿った感触があった。それはイサナに触れた手を伝って、クナイの服にもじわじわと染み込んで来る。

「何これ」

生暖かくて気持ち悪い。
そのとき、夜の訪れに街灯が点灯し、その色を映し出した。
ひどく鮮やかな赤い色。

「……何これ……姉ちゃん……」

いったいどういうことなのか分からない。分かりたくもない。

「起きろっつては姉ちゃん！」

いつまでたっても起きてくれないイサナに怒鳴るように言う。

「やだ、やだ……やだよ姉ちゃん！ 姉ちゃんっ！」

Act・5

「わあああっ!!」

叫び声と共にクナイは目覚めた。息が苦しい。気分は最悪だった。

「気がついたか」

聞き覚えのある声が出て顔を上げると、そこにはアキツがいて、着ていたコートを干している。

「お前……」

「今、ココが水を貰ってきている」

クナイは自分がベッドの上に寝ていることを理解して、部屋を見回した。

「ココは」

「親切的な飯屋の女将の家だ」

言われて少し安心し、そして思い出す。

「お前、腕は」

「腕？」

「だって血が……」

「ああ、オイル漏れか」

「オイル？」

「問題ない。ココが修理してくれた」

アキツはロケットが噛み付いた腕を差し出して見せた。袖なしのシャツを着たアキツのその腕。

「……包帯巻いただけじゃねえか」

いぶかしむようにクナイがアキツを見ていると、ココがお盆に水差しとコップを載せて戻ってきた。

「あ、クナイ気がついたんだ」

「おい、こいつ本当にロボットなのか」

「……はい、水」

クナイの問いには答えずに、水の入ったコップをベッドサイドのテーブルに置くココ。

「答えるよ!」

声を荒げるクナイにココは言い返す。

「ロボットだったらどうするの？ アキツを壊すの？ ロボットだから？ そんなことして何になるのっ？」

逆に質問攻めに合いクナイは詰まる。

「うるさいっ。ロボットさえいなければ姉ちゃんは!」

「……姉さんを殺したロボットはどうしたんだ」

一人淡々とした口調で言うアキツに、クナイも少し声のトーンを落とす。

「知らないよ。回収されたんだろ……あれから見てない」

「クナイのやっていることは、単なる八つ当たりという奴だな」
「なんだと」

クナイがアキツを睨む。

「なら、もし姉さんを殺したのが人間なら、クナイは周りの人間を皆殺すのか」

「そ、そんなことするわけないだろ！」

驚いたように言うクナイだったが

「クナイがやっているのはそういうことだ」

アキツに言われて言い返せない。

「アキツ、ちょっと言いすぎだよ」

ココはアキツを注意する。このロボットは見た目は人間なのに、人間の持つ怒りや悲しみに相当する機能は持ち合わせてないのだ。

「お前に何が分かるんだよ。ロボットのくせに！」

「分からないな。俺はロボットだ」

当たり前のように返されて、クナイは何か言いたそうにしていたが、不貞腐れたようにベッドに寝転んでしまった。

「本当は……本当は分かってたんだ。こんなこと、何にもならない
つて。それは、姉ちゃんを殺したロボットでも同じで。俺が本当に
……本当に戦うべきなのは、あのロボットを作った人間なんだって」

何体のロボットを壊しても、いくら粉々に砕いても、少しもすつきりしなかった。分かつてはいたのだ。あれはロボット。人間が作り出したプログラムで動く鉄の固まりにすぎない。

「ロボットと同じようにはいかないな」

アキツが言った。

「ロボットは壊してもまたすぐ直せる。人間はそうはいかない。傷つけば血が出るし、壊したらもう戻らない」

「分かつてるよっ!」

クナイは叫んだ。

「分かつてるから……だから怖くて……でも悔しくて」

「クナイ……」

ココはクナイに掛ける言葉を探す。

「俺は弱い……あの頃からずっと、弱虫のままだ……」

「違うよクナイ。クナイは優しすぎるんだよ。人を簡単に傷つける人なんてたくさんいるのに、クナイにそれができないのは、きっとクナイが優しすぎるからだよ」

クナイは姉を殺された。それでもその原因となった人間を傷つけることができない。それは弱虫だからではなく、クナイが優しすぎるから。

『あなたは優しいイイ子だよ』

そう言っていた姉の言葉を思い出し胸が詰まる。クナイは両手で顔を覆った。その端から涙がこぼれる。

「俺……何やってんだろ。今度は俺が守るって言ったのに。俺、言ったのに」

イサナがいなくなってから自分がしてきたことといえば、無関係のロボットを壊すことだけ。

「何やってんだろ……」

モグラ通りは街の住人でも迷ってしまうことがあるほど入り組んでいて、何処に何の店があるのか分からない。そんな店の一つから、アキツとココは出てきた。

「有難うございましたー」

色々と店の中を探してくれた店主に礼を言う。

「ここにもないか“ココロ”」。モグラ通りって、ここだよな
「これだけ店が並んでいてないとはな」

もう数十件もの店を覗いて、何人もの人に話を聞いたが“ココロ

”は見つからなかった。

「アキツ、クナイどこ行っちゃったんだろね」

あの後、少し目を離れた際に、クナイの姿は消えてしまっていた。

「元々、怪我をしていたわけじゃない。心配いらないだろう」

「アキツ、怪我するのは体だけじゃないんだよ？ クナイはロボットを壊すことで、自分の中の何かを保ってたんだと思うんだ」

「難しいな、人間は」

そう難しい。

「“ココロ”ができればアキツにも分かるよ」

ココは笑いながら言った。

「さてと、次の店行ってみようか」

と、一番近くにあった店を覗き込んだときだ。

「おい」

後ろで声がしてココは振り向いた。そこには仏頂面をしたクナイが立っている。

「クナイ……何？ またアキツを壊すつもり？」

ずいとおキツを庇うようにクナイの前に立つココ。しかしそんな言葉は無視をしてクナイは言った。

「モグラ通りは機械が溢れてるけど、どいつも古い型ばかりなんだ」
「えっ？」

「お前らが探してるようなもんが本当にあるとしても、ここにはない」

モグラ通りでは若い女の子の機械技師と少年が、ロボットの“ココロ”という部品を探しているという話が広まっていた。中には尾ひれがついて、たいそうな笑い話になっているものもある。それでも探し続けるココたちに、クナイはつい声をかけた。

「なぜそんなことが分かるんだ」

アキツに訊かれてクナイは気まずそうに視線を落とす。

「俺も探したから……姉ちゃんを殺したロボットのこと」

初めから無差別にロボットを破壊してたわけではない。

「あれはこの辺りでは珍しい、新型の部品を使ってた」

「そう……」

「俺、決めたんだ。俺、探す。姉ちゃんを殺したロボットを。……それを作った人間を」

力強い声で言ったクナイだったが、

「見つけてどうする」

アキツに訊かれて、少し困ったような顔をする。

「それは……見つけたとき考える……」
「で、どこに行くの？」

今度はココに訊かれ、その質問にははっきりと答える。

「新型の機械や部品は、ほとんど軍の奴らが持っていったら
しいから、東の国境へ行く」

「じゃあ、ロボットの“ココロ”もそこにあるかもね、アキツ」
「そうだな」

「よし、行こう。アキツ、クナイ」

先頭に立って歩き出したココに、クナイはポカンとする。

「は？ 待てよ。俺は別に一緒に行くなんて言ってないぞ」

「なんで？ 目指してる場所が一緒なんだから、一緒でいいでしょ？」

首を傾げ、そしてあっけらかんと言った。

「一緒の方が楽しいし」

「おい」

「出発ー！」

「おいってばー！」

クナイの抗議の声などまったく聞いちゃいない。

「行くぞ」

アキツもココの後について歩き出した。

「ちょっと……」

「楽しいらしいぞ。一緒の方が」

感情のないロボットに言われて、クナイは少し迷う。確かに一人旅は心細いかもしれない。

「し、仕方ねえな。分かったよ。一緒に行つてやるよ。それでいいんだろ！」

飽くまでも自分には一緒に行く気はないことを強調して、クナイは言った。

「早くしろ」

すでに少し先に行っているアキツが、後ろを振り返りながら言う。

「うるさい。今行くよ！」

アキツとココを追いかけようと足を速めたクナイは、街を出たところで一度立ち止まり振り返った。小さな頃からイサナと二人で過ごしてきた街がそこにある。煙たくて、汚くて、貧しくて。それでもクナイにとってはイサナとの大切な思い出が詰まった街だった。

「行つてきます……姉ちゃん」

一言呟くと、クナイはアキツたちを追って駆け出した。

ROBOT HEART・2
- ヨウムシ - 終了

Act・0

> i25515 | 949 <

ROBOT HEART・3

- ナマエ -

茶色くやせ細った葉、乾ききった大地。

そんな姿ですら戦争後のこの国では今、見ることは難しい。

緑のあふれる森や、風にざわめく草原がかつて

この国にもあったことなど、覚えている者は少ない。

もちろんそこに生きていた、小さな虫や動物など、

街で生まれ育った子供は、名前さえ知らない者もいる。

それを思うと、そんな場所に生きていけている人間とは

意外と生命力の強い生き物なのではないだろうか。

ザクザクと砂利を踏みしめる三つの足音。

ココは空を見上げた。街の下層部で育ったココには、眩しいくらいに開けた青い空。視線を前に戻すと、真っ直ぐに伸びる列車のレール。

ココは今、線路の上を歩いていた。その横にはアキツ。そしてその少し後から、クナイがしかめっ面について来る。

自称『完璧な人型ロボット』アキツの“ココロ”を作るための旅は、姉を殺したロボットを探すクナイが加わったことで、少し賑やかな物になった。

目的地は東の国境。軍の基地や施設が、今はそこに集められているらしい。そこならばロボットについても何か分かることがあるかもしれない。

「わあ……草むらだ」

しばらくして現れた景色に、ココは感動を含んだ声をもらした。

線路の両脇に茶色く乾いてはいるが、一面の草の海が広がっていた。

「アキツ、見て見て。ススキ」

ココは線路脇に生えていた草を見ると、一本引き抜いてアキツの前に差し出した。

そんな楽しそうなココとは逆に、歩くたび砂利が足の裏に与えるゴツゴツとした感触に、クナイはだいぶ苛ついていた。

「まったく。次の街までの景色がこれかよ」

そんなことより何より。

「線路の上を何で歩かなきゃならないんだ！」

次の街まではかなり距離があり、ココたちは列車に乗ろうと駅へと向かったのだが、列車は全て止まってしまっていたのだ。

珍しいことではない。電気や燃料、資源の乏しい東の国では、あらゆる資源の供給は、上層部の人間や政府、軍の施設に優先して流れるのが当たり前のこと。

アキツはココが目の前に突きつけた草を見た。

「ココ、それはネコジャラシだ」

そう言うと草むらへと目をやり、何かを見つけたように線路から草むらの中へと入って行く。

「政府の奴らはいっつもこうだ。あいつらは俺たちのもんを取り上げていく」

クナイの不満は収まらない。

金持ちや権力者のやり方は大嫌いだ。だいたい、線路とは列車が走るべきなのだ。人間が足で歩くところじゃない。それに、もうだいぶ長いこと歩いている。

愚痴が次から次へと口をついて出る。

なんていうことはない。まだ幼いクナイは、少し歩き疲れたのだ。

「ネコジャラシ？」

「ネコジャラシとススキでは形状が少し違う」

アキツはココが手にしている草よりも、大きく穂が豊かなそれを引き抜いてココに持ってきた。

「ススキはこれだ」

「へえー」

そんな呑気なやり取りをしているアキツとココに、クナイは更に苛々する。

「俺の話を聞けよ!」

「だって、あたし街からほとんど出たことないから、こついつの見たことないんだよ」

アキツのくれたススキを振りながらココは言った。

ココの住んでいた場所は、地面はアスファルトに覆われ、周囲は高い建物に囲まれていた。そんな雑草すら顔を出せない場所。

それは工業街で育ったクナイも同じで

「そついや、お前はどこから来たんだよ」

感じた疑問をクナイはアキツに投げかけるが、アキツの返事はない。

「おい、お前だよ。無視か!」

先ほどよりも強く言葉を投げかけられ、アキツはクナイを見た。

「俺の名前は『おい』でも『お前』でもない」

返ってきたのはそんな言葉で、クナイは呆れる。

「どうだっぺいいだろ。そんなん」

「よくない。名前を持つことは大切だと言われた」

アキツの言い方に、ココは前にも感じた疑問を思い出した。

「誰に？ アキツ、前もそんな風に言った」

「俺に名前を分けてくれた男だ。ここの風景に少し似ている草の茂った街の外れで、俺はその男に拾われた」

アキツは再び草むらに目を向けた。枯れた葉が風にざわめく。

「男の名前はトンボと言う」

草を掻き分け、そこに古い単車の残骸があるのを見つけたタキは、少し離れたところで、さもやる気がなさそうに、棒切れで草をバサバサ叩いているだけの相棒を呼んだ。

「トンボ」

「ああ？ なんだよ」

「こっちにあるぞ」

「……ったく、鉄屑拾いも楽じゃねえなあ」

意欲的に働いているわけでもなくせに、そんなことを言うトンボ。

休戦状態の今、東の国は資源が乏しく、屑鉄でも集めれば金になる。別に割りのいい仕事というわけではなかったし、やりがいなんでもものない仕事だったが、そんなことは二人には、とりあえずどうでも良かった。

二人は軍人だったが、今は離隊した身だった。

「これでも今じゃ貴重な資源だ」

タキの切れ長の目が、馬鹿にしたようにこちらを見ている。いいから、さっさと働け。

タキの言わなくても聞えてくるそんな声に、トンボはまだやんちゃな少年のような面影を残した顔を顰めて、タキの元へと渋々足を進めた。

「ん？」

胸元まである草の中、トンボは何か柔らかかな物を踏みつけ足を引いた。

なんだ？

草を掻き分け、足元を見る。

「おい、トンボ！ 早く手伝え」

なかなか手伝いに来ないトンボに、タキが少し苛立った声で呼ぶ。しかし見ると、トンボは足元に顔を向けながら、茫然と草の中に立ち尽くしていた。

様子がおかしい。

「トンボ、どうした」

声を掛けるが返事をしない。作業の手を止めるとタキはトンボの元へ近づいた。

「どうしたんだ、トンボ」

肩に手を置くが、トンボは俯いたままだ。その顔は心なしか青冷めている。

「なんだ。気分でも悪いのか」

「子供……」

「何？」

「子供が……死んでる」

「は？」

トンボは虚ろな目で目の前の茂みを見ている。

「……どけ」

タキはトンボを押しのとけると、トンボの視線の先にある茂みを掻き分けた。

そこには十六、七くらいの歳の少年が一人、仰向けに転がっていた。額から頬にかけてびっしりと赤黒いものが、すでに乾いてこびり付いている。着ている黒い服もところどころが破け、その破れ目から染みが広がり、黒い服をさらに黒く染めていた。

タキは思わず息を呑んだが、よく見るとその胸が小さく上下していることに気がついた。

「トンボ！ しっかりしろ、人を呼んで来い！」

タキは言つて、少年の呼吸を調べる。しかし、トンボはまだぼんやりとそれを眺めているだけだ。

「トンボ!!」

タキの鋭い声に、ようやくハツとしたように自分を取り戻す。

「わ、分かった!」

トンボは慌てて草の中を駆け出した。

Act・2

古めかしい柱時計の音に、少年は目を開いた……が、どうやら左目しか開くことができない。開かない右目に手をやると、そこには布が当てられていた。

体も自由が利かず、ベッドに寝かされているということだけが分かる。

左目だけで辺りを伺う。

薄暗い部屋の中には、先ほど音を立てた時計。窓にはカーテンが引かれていて、外の様子は分からない。

そして、ベッド脇には男が二人、それぞれ椅子に座っている。

一人は本を読んでいたが、もう一人の首はコクコクと船を漕いでいた。

「ん……」

タキは読んでいた本をめくろうとして、少年が目を開けているのに気がついた。今にも眠りそうなトンボの頭を引っ叩く。

「おいトンボ。気がついたぞ」

「本当か?!」

トンボは椅子から跳ね上がり、ベッドを覗き込んだ。そして少年の目が自分を見たのを確認して涙ぐむ。

「生きてる……生きてる。良かった！良かったあ……」

「泣くな馬鹿。静かにしろ。……平気か、気分は？」

トンボに冷たく言い放ってから、少年には少し柔らかい口調で夕

キは訊いた。

「……問題ない」

少年は意外にもはっきりとした口調で返してきた。

「本当か？ 体、痛いだろう？」

「どこも痛くはない」

「でも……」

またもはつきりと返された言葉に、タキが眉を寄せる。

「どけよタキ。良かったなあ、死んじまってるかと思ったんだぞ？」

納得いかない様子のタキを押しつけて、トンボが少年に詰め寄る。

「あ、俺トンボってんだ。こっちの愛想のないのはタキな。で、こ
こ俺の家。お前、名前は？ 歳は？ どっから来た？ いてっ！
なんだよっ！！」

タキの拳を頭上に受けて、言葉を切るとトンボはタキを睨んだ。

「ナンパか……少し黙れ。怪我人だぞ」

「大事なことだろお？」

タキに注意されてトンボがふくれる。すると、トンボの質問に黙
っていた少年が口を開いた。

「わからない」

「え、何？」

自分を見るトンボに、少年はもう一度、しっかりとした口調で答える。

「それらの質問に答えるべき言葉が浮かんでこない」

「おいタキ、どういうことだよ」

少年に休むように言うとトンボとタキは隣の部屋に移った。ドアを閉めたとたん、訊いてきたトンボに、タキは腕を組み考える。

「記憶をなくしているようだな」

「なにい！」

「それにおかしいぞ、あいつ。体は衰弱しているし、怪我もかなり酷い。どこも痛くないはずはない」

「でもケロツとしてたじゃんか」

「だからおかしいと言っている。……やっかいだな」

タキの最後の一言に、トンボはムツとした。

「そんな言い方ねえだろ。あいつだって、怪我したくてしたわけじゃないだろうが！ お前がそんな冷たい奴だとは知らなかったね」

「……どうする気だ」

「あいつが良くなるまで、俺様が面倒みてやるってんだよ」

意気揚々と言っただけのけたトンボだったが、そんなトンボにタキは静かに言った。

「トンボ、お前がそんなことをする必要はないはずだ。あの時の償いでもするつもりか」

「何？」

トンボは険しい表情でタキを見た。

「あれはあの時の子供じゃない」

「そんなこと…そんなこと分かってる。そんなつもりじゃねえよ…」

苦々しく言っただけ視線を落としたトンボを、タキは痛々しそうに見ていたが、

「ありや、俺が拾ったんだ。だから俺のもん！ 文句あつか！！」

完全に開き直ったトンボに、タキは呆れた。

「拾ったものは交番に届ける……阿呆が」

トンボは少し後悔していた。つい言い返したが、本当はタキが正しいことも分かっている。というより、いちいち正しいところが、ときどきムカツクのだ。

記憶のない子供を見るなんて、どれほど大変なことか。警察にすぐにも届けるべきだろう。自分が面倒をみる必要など何も無い。そんなことは分かっている。

トンボは少年の部屋をそつと覗いてみた。すると、少年はベッドから起き上がり、窓の外を見ていた。

「よお、もう少し寝てたほうがいいぞ」

少年はトンボを見て、それから自分の包帯の巻かれた腕を見た。少年の背は小さくはない。しかし、ガツシリというよりはひよろつとしている。はっきりとした歳は分からないが、まだ子供にしては無駄な肉が何もないその体は、まるで作り物みたいだった。

「……酷い怪我だな。痛いだろ」

「いや。なぜこんなことになっているかも分からない」

「まあいいさ、ゆっくり思い出せ。良くなるまで、ここに居てもいいからよ」

「……」

一言そう言っただけの少年。

「『ありがとう』くらい言えよ。人に親切にされたら礼くらい言うもんだ」

頼まれたわけでもないくせに偉そうに。と、タキが言いたげに見えるが、

「……『ありがとう』」

少年は素直にトンボの言葉を繰り返した。

「よし、宜しくな」

トンボは手を差し出したが、少年はそれを眺めているだけで、トンボは少し脱力した。

「ほら、手を差し出されたら、握り返すんだよ」

言ったトンボに、またも少年は言われるがまま、自分も手を差し出しトンボの手を握り返した。すると、

「ギャア！」

慌ててトンボは少年の手を振り解いた。

「俺の手を潰す気がっ?!」

怪我人のものとは思えない握力に驚く。いや、怪我をしていなくても、そんなに力のあるようには見えなかったのだが。

「見た目に似合わない馬鹿力だな……おお、いてえ」

確かにこりゃあ、大変そうだ。

そんなトンボを冷めた目で見ながら、タキは帰り支度を始める。

「俺は知らないからな。どうなっても」

Act・3

「トンボはよく泣き、よく怒り、そしてよく笑う男だった」

アキツの話の聞きながら、線路の上の旅路は続く。

「俺の故障は三日目にはほとんど直っていた」

アキツが言って、クナイは自分を助けたときの、アキツの“オイル漏れ”を思い出す。

「故障……ね」

暖炉の火がはぜる暖かな部屋で、トンボは茶を入れるためにヤカンを火にかけた。

「なあ……自分が誰かわからねえって、どんな感じだ？」

起き上がることを許可され、テーブルについている少年はいつもの口調でトンボの疑問に答える。

「別に。ただ真っ白な辞書を読んでいるようなものだ。探しても答えがない」

「ふうん……」

分かったような分からないような。

「お前になんか名前考えないとな」

唐突に言ったトンボに、少年は首を傾げる。

「名前？」

「そ、名前」

「別にいらない」

興味の無さそうな少年に、トンボは眉を吊り上げる。

「あほう。名前つてのは大切なんだぞ！ 例えば……お前のこと誰かに話したいとき、どうしたらいいんだよ。遠くからお前のこと呼びたいとき、どうしたらいいんだよ。名前はそれが、それだっていう証だ」

テーブルに手をついて力説するトンボに、少年は感心するでも呆れるでもない。

「あんたの名前はトンボだったな」

「そう、トンボ。いかにも風来坊って感じで、俺にぴったりだろ？」

ヤカンが音を立て、トンボは二つのカップに茶を入れると、その一つを少年の前に置いた。

そして思いつく。

「そつだ、お前に俺の名前分けてやるよ。蜻蛉とんぼの別名で、秋津あきつってんだ。なかなかだろ？」

そこにドアのノックの音が割り込んだ。

「……タキだな。開いてるぞ」

言つとドアが開いて思っていた通り、タキがひんやりとした空気を連れて中に入ってきた。

「外は寒いだろ」

「まあな。どうだ具合は」

簡単に答えてタキは少年を見た。

知らないからな、などと言っていたくせに、こうして毎日様子を見に来るところがタキらしい。

「もう平気だよな、アキツ」

代弁したトンボに、タキが驚いたような顔をする。

「アキツ？ 名前を思い出したのか」

「いんや、俺が今つけた」

それを聞いて、いつも冷静なタキが珍しく声を荒げた。

「何をしてるんだ」

「名前がないと不便だろ？」

なにをそんなに怒っているのかトンボには分からない。

「他人に構いすぎるのは、お前の悪い癖だトンボ。あの時だつてそ

うだ。いつまで引きずる気だ」

言ったタキは殺風景な部屋の中、壁に不自然に飾られている勲章に顔を歪める。

実はトンボは軍の部隊では隊長として、小さくはあるが一つの部隊を指揮していた。普段のトンボからは想像しがたいが、軍人として部下からの信頼も厚く、優秀な男だったのだ。

そして戦争が大嫌いだった。

「戦場から離れたお前が、いつまでもこうやって目立つところに勲章なんか飾っているのは、自分に対しての戒めのつもりか！」

「そんなんじゃないって」

タキの強い言葉から目を逸らす。

「こんなものは……」

タキは勲章を手に取った。

「何すんだよ！」

「暖炉にくべちまえっ」

「タキ！！」

勲章は火の粉を舞い上がらせ、暖炉の中へと消えた。

「いい加減忘れろ」

「お前に何が分かるんだよ！」

タキの胸倉を掴むトンボ。

「ああ、分からないな。あの子供は」

反論しかけたタキがトンボの後方を見て、驚愕に表情を強張らせる。

「……どうしたタキ」

「これは大切なものなのか」

アキツの声がした。

「え？」

トンボが振り返ると、アキツが暖炉に投げ込まれたはずの勲章を手をしている。

「別に燃えてはいない。煤すすがついただけだ」

アキツは言いながら勲章についた煤を手で払う。
一瞬、何が起こったか分からなかった。

「アキツ！ 何やってんだっ。タキ、水！！」

トンボはアキツの手首を掴んで手を見た。勲章がアキツの手から床へと落ちる。その手の平は触ることが躊躇われるほど焼けただけている。

「バカヤロオ！ 火の中に手を突っ込むなんて」

取り乱すトンボをアキツは小さく首を傾げながら見る。

「何を怒っているんだ」

トンボは平然としたその顔を見て、愕然とした。

「アキツ……お前……熱くないのか……？」

苛つきながら部屋を行ったり来たりしていたトンボは、テーブルを拳で叩き、医者を送り戻ってきたタキを睨みつけた。

「どうなってるんだよ、タキ！」

「おかしいとは思ってたんだ。あの怪我で痛くないなんて」

「だから、どうなってるんだ！」

「あいつは感じないんだよ。痛みも熱さも」

静かに答えるタキ。

「感じない？」

「それに、おそろくだが感情もない」

「な、なんでだよ」

感覚がないというのは、百歩譲って、いや、千歩譲ってまだ分かるでしょう。しかしなぜ感情まで。

「お前なら、たとえ熱くないと分かっているても、平気で火の中に手をつ突っ込めるか。そこに恐怖心があれば出来ないことだ。正直俺は、

平気で火の中を探っているあいつを見て、ぞっとした」

まるでただの赤い光の中を探しているかのように、自分の手が焼けていくのを気にもせず、火の中から勲章を拾い上げた、眉一つ動かさなかったアキツの顔を思い出す。

「もう一つ訊いていいか、タキ。あいつの……手の平のバーコードみたいな、なんだよ」

トンボの質問にタキは、やはりという顔をした。

「お前が気にすると思って言わなかったが、胸の辺りにも同じものがあつた」

怪我の治療をしているときに見た焼き押されたような模様は、胸と右手の平に付けられていた。

「何だよ、あれ」

「俺にも分からない。手の平のは今回の火傷で消えると思うが……」

誰かが何かの識別のために付けた模様。そんなことを言えば、またトンボは荒れるだろう。

「なあ……タキ。何も感じないって、どんなだろな」

すっかり力をなくしたトンボの声。

「何も感じないんだろ」

そんなこと分かるはずがない。

「それってさ……寂しいな」

「だから『寂しい』なんてのも、ないんだろっが」

「ああ……だからそれって、寂しいよな」

寂しいという感情すらないそのことが、とても寂しいと思う。

「……そうだな」

珍しくタキはトンボの言葉に同意した。

二人のやり取りを、アキツは隣の部屋で聞いていた。

痛みがないということ、感情がないということがどういふことなのか、アキツには理解できなかつたが、二人の会話の内容からどうやら自分が他とは違うのだということとは理解できた。

「ガオーン。スーパーロボットパンチ!!!」

子供の声がして、アキツは窓から外を見た。

玩具のロボットを手に、小さな少年が二人遊んでいた。

「こっちはロケットキックだ。ドーン！」

一人が、もう一人のロボットに自分のロボットを体当たりさせた。当てられた方の少年は手にしていたロボットを落としてしまい、それはガシャリと音を立てて乾いた地面に落ちた。

地面に直接叩きつけられたロボットの右腕が、壊れて体から外れてしまう。

「ああっ。俺のスーパーメタリック号が！」

少年にとって大事な玩具なのだろう。慌ててロボットと外れてしまった腕を拾い上げる少年の顔が、悲しげに歪む。

「何すんだよ。腕取れちゃったじゃんか。痛いだろ、メタリック号」
「……」

まるで話しかけるように玩具のロボットに言う少年に、もう一人の少年は小さく肩をすくめた。

「痛くねえよ。ロボットだもん」

そして、壊れたロボットを持った少年の背を押し歩き出した。

「接着剤でつければ直るって」

タキはトンボを探して家のドアを開けた。そこにはアキツがテーブルについて本を読んでいる。タキは少し考えたが、アキツの前に座ると声を掛けた。

「何の本を読んでいるんだ。ずいぶん難しそうだな」
「タキ」

アキツは本から顔を上げた。その手に包帯はない。タキは思わずその手を取った。二日前に焼けたそこは、すっかり新しい皮膚に覆われている。

「……驚いたな。綺麗に治ってる」
「タキ、話がある」
「俺にか。トンボじゃなくて」
「トンボはすぐに怒るか笑うかで話が進まない」

トンボの性格を指摘するアキツの抑揚のない声に、タキは苦笑する。

「まあな。それで、なんだ」
「俺が何なのか、分かった気がする」
「記憶が戻った……訳ではなさそうだな。で、何なんだ、お前は」

「俺はロボットだ」

タキは一瞬キョトンとしたが、生真面目な顔のままのアキツを見て笑った。

「冗談が言えるようになったのか」

「真面目に話している。俺とそれは似た点が多い」

「でも、俺には人間に見えるけどな」

笑うのをやめ、タキはアキツにそう返す。

「見た目だけの問題だ。俺はおそらく完全な人型ロボットだ。技術的には難しいが不可能ではない」

タキはアキツが手にしている本を見た。どこで手に入れた物なのか、医療と科学に関する物のようで、その内容はタキにも難しい。

「他にも読んだ。二足での歩行から人工での皮膚の生成まで、あらゆる物が人の手で造ることが可能だ。ただ、感覚という機能に関しては曖昧だ。しかし、生き物であればそれは自然に持っているべき機能だ」

それを持たない自分はロボットだと。

「なるほどな……面白い考えた」

タキが感心したように言ったときだ。

「ちっとも面白くない!」

不機嫌な声が見ると、ドアの向こうにトンボが立っていた。

「やはり怒った」

アキツが呟く。

「そうか？ なかなかの考えだと思っぞ」

言ったタキにトンボはズカズカと部屋に入ってきてタキに詰め寄る。

「こいつのどこがロボットなんだよ！」

「じゃあ、トンボはなんでアキツが人間だと思う」

逆にタキに訊かれて、そのおかしな質問にトンボは拍子抜けといったように口をポカンと開ける。

「だって、どう見たって……」

「アキツも言っていたが、それは見た目だけの問題だ。お前の言う、人間の定義ってのは何だ。人の形をしていることか？ それなら文字通り『人形』でもいいことになる」

それを聞いて、トンボがまた声を荒げた。

「人形なんかと一緒にすんな！ アキツはこうして生きてんだろっ」「何も感じないでな」

最後に一言、タキは静かに言った。言葉に詰まったトンボの顔が情けなく歪む。

トンボはアキツの両肩を掴んでアキツを見た。

「アキツ、思い出せよ。どうしてお前、そうなっちゃったんだよ。一体誰がお前にあんな……あんな物みたいな印つけたんだよ」

つい肩を掴む手に力がこもっていることに気づいて力を抜くが、掴まれた肩が痛むこともアキツにはない。

トンボは顔を伏せた。

「なんでトンボが泣くんのだ」

アキツに言われてトンボは鼻をすすった。

「だってお前は泣けねえじゃん」

すると、トンボは何かを決心したように顔を上げた。

「決めた。お前がロボットなら、俺が人間にしてやる」

「……また、とんでもないことを言い出したな」

宣言したトンボに、タキが溜息をつく。

「文句あつかよ」

タキを一度睨んで、トンボは改めてアキツに向かって言った。

「俺がロボットのお前に“ココロ”をやる。だから心配すんな」

Act・5

クナイは足元に転がっていた大きな石を蹴っ飛ばした。

「心配なんてこともお前しないだろ」

次の街までは、まだまだ歩き続けなければならぬそうだ。

「トンボはとにかく一人で突っ走る男だったからな」

アキツの話もまだ続く。

「それからというもの、トンボはあらゆることを俺に教えようとした」

トンボはアキツの前にシチューの入った皿を置いた。

「さてと、腹が減らなくても、物は食わないと体はもたないからな。食事の時間はちゃんと決めておこうぜ。その時間が来たら腹が減ってなくても食う。さあ食べ！」

感覚を持たないアキツには空腹感というものもなく、ほおっておくと自分からは何も食べようとしななことが分かった。

アキツは言われるまま、スプーンを手にしてシチューをすくって

口に運んだ。

「…………どうだ」

トンボは黙々と口を動かすアキツを覗き込むように見た。

「人参、じゃが芋、玉葱、鶏肉、ブロッコリー。小麦粉、バター、塩、胡椒。わずかに葡萄酒の味がする」
「大正解！！ だけど大間違いだっ！」

そんな言葉が聞きたいわけじゃない。

普通、料理を口にしてどうだと訊かれたら、食材名を言う奴はいない。そして隠し味まで当てるな馬鹿。

トンボは額に手を置いて考えた。

「なんつーか、こう…………美味いつ！ とか、まずい〜とかないか」

笑顔を作ったり、顔を顰めたりしながら言うトンボに、アキツはシチューの皿を見る。

「…………これは美味しいのか」

アキツに訊かれてトンボは困る。

『美味しい』と『まずい』という感覚もアキツには分からない。口にした味が『美味しい』なのか『まずい』なのかの判別がつけられない。

本当はこれは『美味しい』なのだと言いたいところだが。

「俺はそんなに料理上手ってわけじゃねえよ。ま、これは家庭の味って奴かな…………」

トンボの言葉に、アキツはシチューをもう一度口に運ぶと、味わうようにしてから飲み込んだ。

「……記憶した」

「よし」

トンボはアキツの頭をポンと叩いた

いつかこうして蓄えた記憶の中から、自分に合うものと、そうでないものとの違いが出てくればいい。誰かの感覚を押し付けるようなことはしてはいけないと思う。

それが好みであり感覚なのだから。

よく晴れた日、トンボとタキはいつものように鉄屑拾いに出かけた。今日はアキツも連れている。

二人から少し遅れて歩くアキツは乾いた草原を見ているが、その顔はやっぱり無表情で、何を考えているかは分からない。

「どうだ。人間になる訓練は」

トンボの姿が離れたとき、タキはアキツに訊いてみた。

「あまりはかどらない」

熱心に伝えようとしているのは理解できる。

トンボの表情は分かりやすくコロコロとよく変化する。アキツに何かを伝えようと、悩んだり悲しんだり、怒ったり喜んだりする様子が見て取れる。しかし

「もともと“コロコロ”という部品がないのに、いくら覚えてもそれは俺自身の感覚じゃない」

「トンボにそんなこと言うなよ。また泣くから」

「分かってる」

アキツは答えて鉄屑拾いを手伝う。見た目以上の力持ちで、言うことをよく聞くアキツは、トンボよりもよく働いた。

「アキツ……お前が本当にロボットなら、その“コロコロ”って部品をどこかで見つけられれば、人間に近づけるんだろっな」

タキが独り言のように呟いたときだ。遠くからトンボの呼ぶ声がしてきた。

「アキツ！ タキー」

二人は声のする方を見た。茶色い草むらの中に埋もれながら、トンボが手を振っている。

「見るよ。ほら、トンボ！」

「そんなことは知っている」

訳の分からないことを言うトンボに、二人はトンボのいる所へと向かった。

「そうじゃなくって。本当の蜻蛉とんぼ！」

「本当の？」

タキは空を見上げた。
風がざわりと吹いて、そこにふわりと群れをなした蜻蛉が姿を現す。

「本当だ……久しぶりに見たな。この辺りにはもういないと思ってた」

感慨深げなタキとは正反対に、トンボはというと草むらを駆け回り、蜻蛉の羽を摘まみ上げると得意気に言った。

「アキツ！ おい、ほら捕まえたぜ。そっちにも行ったぞ。捕まえる」

「……子供か。あいつは」

タキは元は優秀な軍人だったそいつの、はしゃぐ姿に呆れたように苦笑いする。

蜻蛉が一匹、すいとアキツの目の前の草に降り立った。

「捕まえる……」

アキツは蜻蛉に手を伸ばした。

人の気配に気づいた蜻蛉が飛び立とうとしたところを、アキツの手は捕らえた。

「おい」

それを見たタキが、まだ蜻蛉を追い掛け回しているトンボを呼ぶ。

「どうした」

「潰しちまったぞ、アキツ」

「え？」

トンボがアキツを見ると、アキツは握っていた指を開いた。薄く透き通った羽が粉々になり、地面に舞い落ちる。

「そんなつもりはなかったんだが……」

自分の手を見つめるアキツ。

「感覚がわからないんだな。どのくらいの力を出したらいいか」

タキがその手を拭ってやりながら教えた。

「殺してしまったな」

地面に落ちて動かなくなった蜻蛉に視線を落とすアキツを、悲痛な顔で見っていたトンボは、突然アキツの目の前に自分の手を差し出した。

「アキツ、俺の手を握ってみろ」

「……なんでだ」

「物には加減してもんがあんだよ。お前は見かけによらず、すごい馬鹿力だからな。ほら、まず軽く握って」

トンボの言う通り、アキツはトンボの手を握った。

「そう。んんー……もうちょい強く」

アキツはトンボの顔を見ながら、手に入れる力を少しずつ増していく。

「もうちょい平気だ。うん……そう、そのくらいだ。人の手なら、そのくらいの力を出しても壊れやしないから大丈夫だ」

「……記憶した」

「よし」

そして、覚えたことを思い出すように、手を閉じたり開いたりしているアキツに、付け加えるようにトンボは言った。

「あ、ただし女の子の場合はもっと優しくだ」
「なんでだ」

アキツが訊き返すと、トンボはそんなことも分からないのかというような顔で、ふふんと笑った。

「そりゃあアキツ、女の子は男より、か弱くて繊細だからな。大切に扱わなきゃいけないわけよ」

「お前も女の手なんか握ったことないだろ」

タキがすかさず口を挟む。

「うるせえよ、お前は！」

アキツはそんな二人の様子を黙って見ている。

「……………アキツ……………。お前さ、笑おうぜ」

トンボが決まり悪そうに言うと、タキも指摘する。

「ああ、今のは笑うところだ」

「タキ、お前は後で泣かす」

アキツは首を捻った。

「笑う」

「別に無理に笑えとは言わないけどな。可笑しくも楽しくもないのに笑う必要なんてないんだけど、人の笑顔ってのは、やっぱりいいもんだぜ？」

「笑顔……か」

どうすればいいのか分からない様子のアキツに、ふむとトンボは考えた。

「いいか、こう……口の端をちょっと上げてな」

アキツの頬を掴まんて持ち上げてみる。しかしこれだけでは何か足りない。

「目を細めて……」

それから

「目尻はやや下げる」

どうやら出来上がったらしい笑顔から手を放してみても、トンボは複雑な顔をした。

「どうした」

作られた笑顔を保ったまま、アキツはトンボに訊ねる。トンボはそんなアキツの頭をグシャグシャと撫でた。

「いや、はは。いい笑顔じゃねえか。うん。いい笑顔だ」
「トンボ」

様子のおかしいトンボにタキは声を掛けるが、トンボはアキツの眉間をぐいと指で押し

「よし、インプットだ！ 忘れんなよ、その顔。……さてと、帰るか」

タキに背を向け、先に家路を歩き出した。

「どうしたんだ、トンボは」

訊きながらタキを見るアキツの顔は、元の無表情に戻っている。

「お前の笑った顔が似てたんだよ」
「誰に」

「話す気があれば、あいつから話ささ」

珍しく少しだけ困ったような顔をしたタキは、すぐに小さく笑みを作り、アキツを促してトンボの後に続いた。

A c t ・ 5 (後書き)

ここまでお読みくだつて有難うございます。
物語はA c t ・ 6へ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8183t/>

ROBOT HEART

2011年11月13日13時47分発行